

野
獸
降
臨

の
け
も
の
き
た
り
て

野
田
秀
樹

〔登場人物〕

アポロ獣一

月の兎

十二単衣ひとえの君

ハイエルダール船長

アルテミス上田

ブリアン少年

人道所長

畜生道所長

北里

東里

南里

西里

清少納言

紫式部

その他

ボクシングのグローブを粹いきに肩からぶらさげて、青年が現われる。四畳半に帰ってきた六回戦ボーイのように見える。
タバコを手にする。と思いきや、タバコのパラフィンだけを口にして、宇宙遊びを始める。

青年

ヒューストン、ヒューストン、こちらアポロ11号、感度いかが？（パラフィンを口に）「感度良好」。僕が見えるか？「画面一杯だ」。了解。「月から地球は見えるか」。見つめると恥じらってる。「地球もお年頃だ」。月とお見合いでもさせるか？「仲人はどうする？」。エーテルでいいだろう。「肩の上に……」

突然、アポロ11号のヒューストンの声が、同時に入ってくる。

あの、ほどよく雑音の入った、宇宙からの通信音である。

秒読みの声、ロケット噴射音など。

宇宙服を着た男達も現われる。無重力である。

そこは一気に月面に変る。

青年も慌てて宇宙服を着る。

ヒューストンの声 肩の上にベニシジミが止ってるぞ。

青年 え？

ヒューストンの声 昆虫こんちゅうがいるのか？

青年 四十億光年の彼方かなたにあるへび座のガス星雲だ。こんなことなら虫取り網を持ってくるんだった。

ヒューストンの声 傍そばに咲いている薔薇ばらはなんだ？

青年 一角獣座のバラ星雲だ。

ヒューストンの声 そいつは手が届く距離か？

青年 ほんの六十億光年のところだ。

ヒューストンの声 では、薔薇を一輪もいでこい。

青年 了解。

ヒューストンの声 地球はやっぱり青いのか？

青年 イギリスは緑色だ。

ヒューストンの声 イベリア半島は？

青年 紫だ。

ヒューストンの声 フランスは？

青年 三色だ。

ヒューストンの声 日本は見えるか？

青年 蔵前国技館が見える。

ヒューストンの声 地中海はどうだ？

青年 南フランスの下で、地中海が大口を開けて笑ってる。

ヒューストンの声 虫歯はあるか？

青年 マジョルカ、サルジニア、コルシカ島ってところが地中海を虫食ってる感じだ。

ヒューストンの声 ギリシアはどうだい？

青年 今日は雨が降ってるだろう。

ヒューストンの声 わかるか？

青年 むらくもが、かかっているのが見える。

ヒューストンの声 オリュンポスは突き出しているか？

青年 ああ。

ヒューストンの声 美しいかい？

青年 あめのむらくもの上に抜きこんでた、あらがね敷いたオリュンポスの宮が夕陽に染まり、くがねの如く輝いている。アフリカがこちらに向って上ってきた。パレスチナの死海も、生きているようだ。太陽がマダガスカル島の付近に落ちようとしている。

ヒューストンの声 帰りたいたいだろうな地球へ。

青年 帰れるものなら。

ヒューストンの声 こちらヒューストン、感度いかが？

青年 帰れるものなら。

ヒューストンの声 こちらヒューストン、アポロ11号？

青年 ……………。

ヒューストンの声 こちらヒューストン。

青年 ……………。

激しい雑音の中に、ヒューストンの声は紛れていく。静寂。

青年 こちらアポロ11号。地球は少しも青くない。まっくらだ。ヒューストン、ヒュースト

ン。骨は生きている。ヒューストン、骨は生きている……。

と、高みに女が立っている。

大きな耳と丸いしっぽ。

宇宙服を着た青年は、びっくりしたようにゆっくりと、その宇宙帽をとると……。

青年 まさかとは思うけれど……。

女 なあに？

青年 君は、月の兎かい？

女 そうよ。

そのとたん、月の兎にだけスポットが当る。

ドロドロドロ、と太鼓の音。

サーカスの綱張りの場となる。

よくみると、その綱は、電信柱から続く電線なのであります。

そこへ、バニー・ガールの格好をした男がでてくるのであります。

男 レデース・アンド・ジェントルマン！ 皆様の目の前にお目見得いたしましたる一匹の

兎は、種も仕掛けもございません。ふる里は静かの海、かぐや姫と生まれを同じゅう

いたしまする月の兎にございます。キララと、みだらなспанコールのキャルマタを

はいて、さあさあ、お立ち合いです。これより綱の上にて、この月の輪をくぐり、「あ

っ！」と思えますれば、いつの間にかこの兎、見事、美しき少年の姿へと転じます。

題して「イカルの月の輪くぐり」！

ドロ、ドロ、ドロ……。

兎、月の輪をくぐると、見事、少年に変わる。
いかにもうまくいった時の音楽。

同時に、大きな獣のぬいぐるみを被った、サーカスの獣達が入ってくる。

それを追うように鞭をふるう猛獣使い達が、やがて獣達を、丸太の門の中へ封じこめる。

そこへ、十二単衣を着た男が、十二単衣を着こんだ女官達を引き連れて、現われる。

男の名は十二単衣の君。

女官の中に紫式部と清少納言。

十二単衣の君 式部。くだんのこと、そいつはまことか？

紫式部 まことでございます。

清少納言 御覧あそばしましたでしょう？

十二単衣の君 遊びました。日がな一日。

紫式部 人の牛と書きまして、件と読みます。

十二単衣の君 人が牛に化けたのね。

紫式部 ええ。

十二単衣の君 そいつは、ちよつとした事件だな……の「件」が、「くだん」という文字なのね。

紫式部 はい。

清少納言 ま、よくある話です。

十二単衣の君 よくあるの？ そんなことが。

清少納言 お話の世界では。

十二単衣の君 「くだんのこと」以外にも？

清少納言 ええ。

紫式部 お清ちゃんばかり相手にして。

清少納言 お清ちゃん？ 清少納言って、言っただろうだ。ムラちゃん。

紫式部 ムラちゃん？ 女中みたいに呼ばないでほしいわね。

清少納言 所詮、田舎役人の娘じゃないのさ。

紫式部 んまっ！

十二単衣の君 まあ、まあ、二人ともいい年をして。(と、尻をさわる)

紫式部 そこは年じゃありません、尻ですよ。

十二単衣の君 お清ちゃん、どうもこの話、合点がいかないのよねえ。

清少納言 いかるところがでございます？

十二単衣の君 人が畜生に化けてはいけなしかしら。

清少納言 いけません。

紫式部 人と生まれては、人の道を全うする。これが人のツトメです。

十二単衣の君 それは、人道主義だろう。

紫式部 さようでございます。

十二単衣の君 僕、畜生道主義だもの。

清少納言 畜生道主義？

十二単衣の君 畜生と生まれて「畜生！」と言いながら死んでいく。

清少納言 まあ、悟りのない。

十二単衣の君 そう畜生呼ばわりした釈迦しゃかの姿を知っているか？

清少納言 「三十二相」あるい或は「八十種好」と申しますお釈迦様の相は、ひとつひとつがみ

めうるわしゅう、そのひとつの相を窮きわめるに、百の善行を積んだのだとさえ言われて
おります。

十二単衣の君 そうです、はい。(仏像のようなものを出し、ムシロをかぶせる)

清少納言 なんです？

紫式部 ドザエモン。

十二単衣の君 いえ、お釈迦。

紫式部 これが。

十二単衣の君 こんな化け物みたいなお釈迦が、よくもまあ。頭が牛になっただけのこと
を笑えるかしら？

紫式部 笑えません。

十二単衣の君 いや、笑える。

紫式部 どうして？

十二単衣の君 おかしいものはおかしいんだ。ただ、ぬすつと猛たけだけ々しいとはお釈迦のこと
よ！

清少納言 なにをなさるんです。

十二単衣の君 くだん達を外へ出すのよ。

紫式部 そんな事をなさっては「うずらの里」は、無茶苦茶になります。

十二単衣の君 ひと皮むけば、みんなお釈迦だ！

様々な半人半獣達が、丸太の門の中からナダレこんでくる。

女官達、右往左往と逃げまどう。

やがて騒ぎがおさまると、そこには、一枚の新聞を手にした青年がひとり立っている。
宇宙服を脱いだ青年である。

青年 その日は月の独立記念日、太陽の親心がやけに暑つくると暑い夏の日だった。ざあざあ

と湯舟からあふれる湯水のような雑音が流れ出してくるテレビの中に月がひとつと、

見上げた空でほろほろと泣き出した月がひとつ、似ても似つかぬ彼と彼女の双子たちの宴の、その隙間を、きめ細かく縫うために一本の串くしが通った。そんな、串ざしのよ
うな夏を見た。

電信柱のてっぺんに月の兎と自称した女。

おそろおそろ、兎は地上へ降りる。

月の兎 初めて地球を踏んだわ。

青年 え？

月の兎 この一步は小さいけれど、兎にとっては偉大な躍進だ。

青年 地球じゃなくて虫を踏んだぞ。

月の兎 あんた、なんでそんな格好してるの？

青年 俺は……。 (まわりをキョロキョロ)

月の兎 なによ。

青年 誰にも言うな。

月の兎 うん。

青年 宇宙家族だ。

月の兎 (大声で) 宇宙家族が、ここにいますよ！

青年 よせ！

月の兎 ロビンソン一家の方？

青年 俺は、アポロという長男だ。

月の兎 何人家族なの？

アポロ 今のところひとりだ。

月の兎 ひとりで家族。

アポロ これから繁殖する。

月の兎 バイキンみたいね。

アポロ 四十も五十も職を変えながら、いろいろなところに住みついた。ただボクシングだ

けは続けている。

月の兎 ボクシング？

アポロ アポロ獣一。

月の兎 ジュウイチ？

アポロ 獣のハジメと書きます。

月の兎 (リングアナウンス風に) アポロ獣一！

アポロ 日本ジュニアフライ級ランキング百六十九位アポロ獣一。過去の戦績——一勝百二

十七敗百二十三KO負け二タオールばせい一罵声。

月の兎 二タオール？

アポロ 俺は、まだやる気があったんだが、おっちゃんの奴が、コーナーから投げたタオルが飛んだこと二回、バスタオルが飛んだのが一回、「もう、やめろいつ！」と罵声が飛んだのが一回。

月の兎 よく一度だけでも勝てたわね。

アポロ デビュー戦を飾った。

月の兎 いつのこと？

アポロ 忘れもしない。アポロ 11号が月に降りたった日のことだ。そいつが俺のデビュー戦だ。

月の兎 勝ったのが忘れられないってわけ？

アポロ うん？

月の兎 めめしいわね。

アポロ 違う。

月の兎 どうして？

アポロ 勝つには勝ったんだが、あばら骨が一本なくなった。そいつを取り返したいんだ。

月の兎 あばら骨を折られたの。

アポロ なくなったんだ。

月の兎 なくなった？

アポロ 試合が終り、計量を済ませてみたら、あばら骨が一本、軽くなっていた。

月の兎 流した汗のぶんでしょう。

アポロ いいや。きっかり三百二十グラム、あの正確な数値は、あばら骨一本ぶんだ。

月の兎 レントゲンをとって見たの？ 消えたかどうか。

アポロ よせ！ そんなものを、とるな！

月の兎 なに言ってるの。

アポロ レントゲンなんか盗^とったら、そいつは盗^とっ人じゃねえか。第一、あんな重い機械を、どうやって運ぶんだ。そこからすぐに足がついちまうわ。

月の兎 レントゲン写真よ。肺を写してみたの？

アポロ 肺をうつす？

月の兎 そう。

アポロ どこに俺の肺を移そうってんだ。勝手に持っていくんじゃねえ。

月の兎 あんた本当に地球人なの？

アポロ 地球？

月の兎 そうよ。

アポロ そこへ俺を戻してくれ。

月の兎 まるでコトバが通じない。

アポロ やめろ、やめねえか、俺の肺に地球を埋めこむつもりか。

月の兎 どうしたの。

アポロ 一九六九年七月二十一日午前二時五十二分、人類が初めて月へ降り立つ、その九時間前、「地人」天へ舞い降りるその時を、九つ前にして、アポロ11号より送られていた通信衛星の回路は、三十分間、音信不通となった。たかが三十分、宇宙をながらう時間からすれば、あばら骨一本にも満たない、その時がぬきとられると、ロケットは蛇のようにくねりながら畸形きけいしていった。俺が最後に聞いた人類の声を教えてやるさ、月の兎。

月の兎 え？

アポロ うさぎ、うさぎ、この手は、なんのためにある。

月の兎 なんのためにあるの？

捕えようとするアポロ。

逃げる兎は電信柱にのぼる。

アポロ 見つかったぞ、ヒューストーン。月の兎だ！

月の兎 このバイキン野郎、汚ねえ真似しやがって。

アポロ え？

白衣を着た男達が四人でてくる。

人道所長 通報が入ったのはここか、北里君。

北里 はい。南里君。

南里 見て下さい、月の兎です。

アポロ しまった。また兎の足をひっぱった。

北里 あそこです所長、電線の上です。

人道所長 確かに、兎の形をした伝説の病いだ。

北里 放つといて大丈夫ですか。

南里 放つとけば、デンセンするに決まってるだろう。

人道所長 通報者は誰だ。善意はどこから届いたんだ。

北里 この方……あれ？

アポロ、逃がっている。

北里 見えなくなりました。

人道所長 ホントの善意には形がないもんだなあ。

南里 あっ、向うの電信柱に飛び移りました。

北里 やはり電線病患者だ。

人道所長 追え！ 伝説の病いを。

電線を逃げる兎を北里、南里の二人は追っていく。
人道所長と馬鹿が残る。

馬鹿 待つて下さい、所長。あたしの日本脳炎も直して下さい。

人道所長 君は完治している。

馬鹿 いいえ、まだまだ馬鹿です。

人道所長 安心しろ。お前の馬鹿は伝染しない。自己完結している。

人道所長と馬鹿も去る。

丸太の門が横に眠ると、それは、筏船いかだぶねのようである。

激しい波の音。

十二単衣の君、転じてハイエルダール船長となっている。

乗り組み員は、ブリアン少年ただひとり。

ブリアン ハイエルダール！

ハイエルダール なんだい、ブリアン。

ブリアン 夜中に聞こえてくる猫の鳴く声と赤ん坊の泣き声の区別がつくかい？

ハイエルダール つくよ。

ブリアン どうやったらわかる？

ハイエルダール それがわかると一人前になる。

ブリアン わかんないよ。

ハイエルダール ソバに近付いてみて、ぴたりと鳴き声やが止んで、身を潜めたならば猫だ、

泣き声が増えます大きくなったら、そいつは赤ん坊だ。

ブリアン そうか。まだまだ僕は半人前だ。

ハイエルダール そうだな。

ブリアン じゃあ、僕のもう半分は、なんなんだろう？

ハイエルダール エーテルだよ。

ブリアン エーテル？

ハイエルダール うん。

ブリアン 星と星との間につまっているやつかい？

ハイエルダール そうだ。

ブリアン ハイエルダールは一人前かい？

ハイエルダール 性欲のことか……。

ブリアン あん？

ハイエルダール (感慨深げに) 昔は十人前だった。
ブリアン そんなこと聞いてないよ。

ハイエルダール 聞いてくれよ、話したいんだから。宇宙の膨張と人間の縮小との因果関係
について。

ブリアン 人間の縮小？

ハイエルダール うん。

ブリアン 人間で、縮んでいるのかい？

ハイエルダール 欲望と一緒に伸び縮みするんだ。

ブリアン じゃあ欲望が十分の一になったから……。

ハイエルダール 体も十分の一になったんだ。

ブリアン ふうん。

ハイエルダール 忘れちゃったのか、ブリアン。

ブリアン なにをさ。

ハイエルダール このパピルススの船が、ポプラの樹に別れを告げて、コハク色した運河を流
れ始める前には、十五人の少年が乗っていたんだ。

ブリアン これは、十五少年漂流記なのかい？

ハイエルダール そうだよ。

ブリアン それが僕ひとりになったのかい？

ハイエルダール お前と俺さ。

ブリアン え？ ハイエルダールも少年なのかい？ どうして？

ハイエルダール どうしてって、僕は少年だよ。一人前の俺と半人前のお前と合せて、一・

五少年漂流記になったんだ。

ブリアン 十三・五人の少年は、どこへ行っちゃったのさ。

ハイエルダール とけてなくなった。

ブリアン どこへ行っちゃったのさ……。 (川の中へ向って連呼)

ハイエルダール 夜は千の眼を持つけれど、葦あしの船が流れていく運河は、一万の足を持って
いる。

ブリアン 一体、どういう運河を流れているんだい？

ハイエルダール 右手を御覧あそあつせ。

ブリアン ダフネの木が見える。

ハイエルダール あれは、月桂樹だ。

ブリアン 右手の岸は、月世界か。

ハイエルダール 左手を御覧あそあつせ。

ブリアン ヒュアキントスとキュパリッソスの木だ。

ハイエルダール あれは、ヒアシンスに糸杉だ。

ブリアン 左手の岸は地球か。

ハイエルダール　そしてここが、少年のために流れたコハク色したエーテルの運河だ。
ブリアン　え？　僕の体の半分を、今、流れて行っているんだね、この船。

ハイエルダール　そうだ。

ブリアン　ねえ、ハイエルダール？

ハイエルダール　うん？

ブリアン　六分儀の向きを変えよう。右手の岸から左手の岸へ。

筏船、向きを変えるとともに、流れ去る。

同時に、人道所長ら四人が戻ってくる。

南里　（スプーンをなめてる）甘口だ。

人道所長　よし、調合しろ。

南里　はい。（試験管から、何か入れる）

北里　なんです。コクサッキー・ファージ・ラムダ一七四ですか？

人道所長　塩だ。

北里　塩？

人道所長　隠し味だ。

北里　ますます氷いちごのシロップに似てきた。

人道所長　そうだよ。

北里　は？

人道所長　氷いちごのシロップを作ってるんだ。

北里　そいつをワクチンといつわって飲ませていたんですか。

人道所長　馬鹿。

馬鹿　呼んだ？

北里　お前じゃない。

人道所長　ワクチンとは、そういうもんなんだ。丸山ワクチンなんか、氷メロンだよね。

南里　それで、おかわりが多かったのか。

人道所長　馬鹿。

馬鹿　……。

人道所長　呼んだんだ。

馬鹿　はい。

人道所長　何してる。

馬鹿　今回の伝染病の調査結果がまとまりました。

北里　馬鹿がまとめてきたぞ。

南里　報告しろ。

人道所長　身体には、どういう異常が起こるんだ？

馬鹿 まず、生まれると同時に、目がふたつになります。

人道所長 ふたつ!? 欲張りだなあ。

馬鹿 鼻がひとつに、口ひとつ、耳がふたつで合せていくつだ。

北里 七つです。

馬鹿 御明算。

人道所長 どうしてたすんだ?

馬鹿 意味がありません。

人道所長 無謀な調査だ。

馬鹿 さらに、腕が二本に、足が二本、胴体ひとつに、おしりはひとつ、ついでに心はひとつのものなあんだ?

北里 難しい。

南里 まるで人間だ。

馬鹿 そうなんです。

北里 なに!?

馬鹿 今回の伝染病の最も特徴的な症状は、フツウの人間の形をして現われる、ということです。

北里 では、伝染病に罹^{かか}っているかどうか、わからないじゃないか。

馬鹿 だから困るんです。もしかしたら、所長もすでに感染しているかもしれないんです。

人道所長 その暮しむきは?

馬鹿 年収百四十万以下。

南里 かなり低いな、良かった。

馬鹿 まず、朝、目を醒^さまします。

人道所長 感染者は、その時、どちらの目から、先に開けるんだ。

馬鹿 人それぞれです。

人道所長 無謀だ。

馬鹿 やがて朝食をとり、ひげを剃^そると、仕事に出かけ、昼食をとると、性懲りもなく仕事をし、夕方には帰宅し、夕食をとり、テレビを見ると、目を閉じます。

人道所長 どちらの目から、先に閉じるんだ?

馬鹿 人それぞれです。

人道所長 無謀だ。

馬鹿 かように、今回の伝染病に感染したものは、平常人と、どこも変わらない暮し向きをしています、表向きは。

北里 裏を向くとどうなる。

馬鹿 炊事、洗濯、家事、SEXに明け暮れたかと思うと、「海水浴に連れてってえーん」

と声か鼻にかかったと思う矢先に、子供を幼稚園へ送り出した後に、炊事、洗濯、家事、クリーニング屋とSEX。

人道所長 無謀だ。

北里 しかし、聞けば聞くほど、ふつうの暮しだ。

人道所長 うん、確かに、人がその生活をすればの話だ。

北里 うん？

人道所長 つまり、この伝染病には、人は罹らないんだ。

北里 誰が罹るんです？

人道所長 獣たちだ。

南里 獣？

人道所長 獣が人にとりつかれるんだ。

北里 え？

馬鹿 ウグルルルッ、ウグルルルッ。

南里 どうした、馬鹿。

人道所長 こいつは、今、馬と鹿に取りつかれてるんだ。

北里 なるほど。

人道所長 けれども、馬だろうが、鹿だろうが、人が獣に変る限りは、美しい伝説となる。

南里 たえば、それが馬ならば。

人道所長 ケンタウロス。

南里 鹿ならば。

人道所長 アクタイオン。

北里 熊に変じれば。

人道所長 カリストー。

南里 おおかみ 狼と転じて。

人道所長 リュカオン。この、人から獣へと姿を変えていく病いは、人の口から人の口へ

とデンセンしていくうちに、美しく着飾られた伝説の病いとなった。

北里 ところが、今度のは厄介ですね。

南里 ことはさかしま、獣が人にとりつかれる。

人道所長 そう、話は逆に流れていく。これは、伝説の電線を、こちらの柱からあちらの柱

へ、正から負へと流れていく電流とはわけが違う。負から正へと流れて、なんとここ

の伝説の流れを節約しようとしている。

馬鹿 それでは、伝説の病いではありませんね。

北里 うん？

馬鹿 節電の病いと呼ぶべきだ。

北里 節電の病い？

人道所長 なにを、そんなにも節約しようとしているんだろう。獣から人へ。

「そつちだ、そつちへ逃げこんだぞ！」の声とともに、男二人が走りこんで来て、ま

た駈け去る。

北里、南里も、その獣狩りに加わる。

全然動いていなかった馬鹿が、なにかごそごそと取り出す。見れば、ほんまものの兎である。

馬鹿 つかまえました！

北里 これか。

馬鹿 これです。

南里 こいつが、人になるのか。

馬鹿 確かに、伝説の柱の根っこをかじっていました。

北里 ただの兎に見えるが。

人道所長 馬鹿。

馬鹿 呼んだ？

北里 お前じゃない。

人道所長 兎に見える、そいつがクセモノなんだ。

北里 はい。

人道所長 野生のエルザが、アダムソン夫人を襲った日のことを覚えているか。

南里 記憶に生々しいです。

人道所長 あれは野生のエルザが、アダムソンにとりついたんだ。

南里 そうだったんですか。

人道所長 けれども、その前の晩まで、野生のエルザは、なにくわぬ顔をした、野生のエル

ザの顔をしていたんだ。

北里 こいつが、なにくわぬ顔をした兎のように。

人道所長 馬鹿！

馬鹿 ……。

人道所長 呼んだんだ。

馬鹿 はい。

人道所長 くだんのもんを持ってこい。

馬鹿 手回しよく。

馬鹿、一枚のレントゲン写真をさっと出す。

人道所長 人に化した獣の肺は、丁度、こんな風だ。

南里 見たところ、正常です。

北里 いや、あばら骨が一本足りない。

南里 一本足りない？

人道所長 三百二十グラムきっかり。

馬鹿 レントゲンの準備ができました。

馬鹿、レントゲン室の箱を持ってくる。

電線から、二本のコードが降りてくる。

人道所長 兎を入れろ！

南里 はい。

人道部長 よし、電気を通せ。あばら骨一本ぶんの伝説を、この兎の中へ流し込め！

ブリアン 待った！

ふりむけば、半人前の少年ブリアンがそこにいる。

北里 誰だ。

ブリアン 半人前の少年、ブリアンだ。

南里 ブリアン？

ブリアン 十五少年のなれの果てだ。

北里 どうやってでてきた。

ブリアン この電線を伝って、このモノミナクサル夜に出てきたんだ。

人道所長 伝説の少年だな。

レントゲン室から兎が、とびだす。

とは言っても、この兎は「月の兎」。言ってみれば、ホンモノじゃありません。

馬鹿 あ！

南里 あいつの後ろにつきやがった。

ブリアン ここには、いないよ。(さっと布つきれで月の兎を隠してやる)

南里 さあとらしい、尻が見えてる。

北里 半人半兎めいこです。

見れば、ブリアンの背中に、「月の兎」は尻をつき出して、くっついていて、隠れるために、頭から布つきれを被る。

ブリアン (兎の尻をさわって) こんなにもお尻おびが替えて。助けてやれ！

北里 そのケツの震えは、喜びかもしれねえだろう。

馬鹿 よし、一発さわってこよう。

ブリアン よせ！（馬鹿をはたく）

馬鹿 こいつ、この兎を庇う気だ。かば

人道所長 それは、親切心だな。

ブリアン そうだ。

人道所長 やい少年。

ブリアン パンツを脱げば大人さ。

人道所長 その大人になっても、その親切心を、いつもいつも忘れないでいられるか。

ブリアン いつも？

人道所長 そうだ。

ブリアン 「時ったま」忘れて「時ったま」親切かもしれない。

人道所長 「いつも」できないくらいなら、親切なんかするな。

月の兎 （布つきれの下から顔出して）私が、「時々」親切するって言いな。

ブリアン うん。「時ったま」に「時々」まで加えて、親切する。

人道所長 「時ったま」と「時々」をたしたって、せいぜい、「しばしば」だ。

月の兎 「しばしば」の親切で悪いか！

ブリアン 興奮するな、お尻やってる。（布の中へ、月の兎の頭を押しこむ）

人道所長 「しばしば」がなんだ！

馬鹿 なんだあ！

人道所長 「いつも」に「いつも」がつながって初めて伝説になるんだ。ああ！ 建国記念

日が来るたびに思い出す。遙かな尾瀬おぜ、建国記念の日の遠い空、そいつに抵抗して、

その祝日にまで登校していた学校好きの少年達は、四十になっても五十になっても、

いまなお登校しているんだろうか。もしも、いつもいつもあの、がらあんとした学校

へ行かないのなら、あの建国記念の日の抵抗は、ただのいい格好しいじゃないか。

そんな話に耳が貸せるか！

ブリアン それなら、僕の親切には耳ひとつ貸さず聞いてくれ。僕はその耳を返す自信がな

いから。

北里 やりこめましたね、所長。

人道所長 ああ、気持がいい。今日は風呂に入るのはよそう。

北里 どうして？

人道所長 これ以上、気持良くななくてもいいから。

北里 そういう理屈で風呂に入ってたんですか。

馬鹿 気をつけて下さい所長、風呂上りの脳溢血のういっけつに。

人道所長 なに？

馬鹿 油断したところが危ないんです。伝説の少年が苦戦すれば、必ずやその少年を庇おうと、

今度は電線を伝って、伝説の青年が現われますから。

南里 現われた！

電信柱の陰に男が立っている。

びくっとして、皆を見る。

ところが、それは、青年ではない。十二単衣の君が転じた、あのハイエルダールである。

北里 いや、青年じゃない。

南里 なんだ、こいつは。

人道所長 少年の晩年だ。

ハイエルダール ブリアン。

ブリアン ハイエルダール。

北里 思い出しました。所長。

人道所長 なんだ。

北里 こいつらは、「いつも」あの猫の目玉が浮いているドブ川に、筏を浮かべた船上生活者です。

人道所長 船上生活者？

北里 まろやかに言ってみました。

人道所長 ズバツと言え。

北里 船の上の乞食です。乞食の親子です。

ブリアン 乞食なのかい、ハイエルダール。

ハイエルダール 乞食？ 控えおろう！ われらこそ、いにしえ古より、ドブ川を所狭しと荒くれる

原始家族なるぞ！

ブリアン 聖家族なんだね。

ハイエルダール 宇宙なんて、どうせ浪費しているだけなんだから、少しも恥じることはない。原始の方が、ずうっとずうっと生産的なんだよ。

ブリアン わかっているさ、ハイエルダール。

馬鹿 なあに、ハイエルダールなんてハイカラな名前です。呼んではいるか、戸籍を調べりゃ、

どうせ岩蔵なんて名前なんだ。

ハイエルダール おっ、当っちゃったよ、ブリアン。

馬鹿 ガキはガキで、ブリアンなんざあ、もっての外だ。梅吉なんて名前に決まってる。

ブリアン 嘘だ、僕はブリアンだ。ねえ、ハイエルダール。

ハイエルダール そうだ。私は岩蔵でも、この子はブリアンだ。

北里 岩蔵！ 早く、そのガキの背中にくっついた兎を渡せ。

ハイエルダール この子は半人前だ。そのもう半人前にナニがくっついていようと、知ったことか！

人道所長 よし、お前の子供は、半分人間で、半分は兎だ、というのなら、面白い。ここは、

どうしても、骨のツクリを見てみようじゃねえか！

ブリアンと月の兎に襲いかかる北里、南里ら。

無理に、レントゲン室へ押しこめようとする。それを、さえぎって――。

ハイエルダール よせ！ そいつは悪魔の機械だ。

北里 悪魔の機械？

南里 はい、息すってえ。

北里 はい、息とめて。

} (3 times)

ブリアン、息を止める真似。

ハイエルダール そこでもし、「はい、息はいてえ」という声が、この子の耳に届かなかつ

たら、いつまでも、この子の親切心は、息を止めているだろう。そして親切とともに死にまうじゃねえか。

人道所長 おっしゃることはいたくごもつともです。しかし、いつもいつも親切であつてく

れればよい。けれども気まぐれは困る。この気まぐれな親切のために、何十億という

バイ菌がばらまかれるんだから。はい、吸ってえ！ はい、止めて！

ハイエルダール 息を止めるなブリアン！

人道所長 止めねえか！

北里 無理にでも止める！

馬鹿の腕ではがいじめされるブリアン。

もみあい^{しばら}が、暫くあつた後に、偶然、ハイエルダールにもレントゲンが向けられる。

ハイエルダール やめろ、やめねえか、悪魔の機械をこっちに向けるな！

南里 なにいつてんだ、こいつは。

ハイエルダール 一瞬にして人間を骨にしちまうなんざ、悪魔のやることじゃねえか。人間

は、百万年かけて、ゆつくりと骨になつていくんだ。皮膚がとけ、目玉がどろっと落

ちて、肉が腐り腸が膿^うんで、心臓が破けて、やつと骨になるんじゃねえか。それでも、

骨ばかりはなくならない。ゆつくりと死んでいく。骨は、まだ生きている。

人道所長 なにを口走ってるんだ。

南里 所長！

人道所長 どうした。

北里 見て下さい、この胸の写真を。

人道所長 やはり、あばら骨が一本足りないか。

南里 いいえそうではありません。

人道所長 なんだ、こいつは。

北里 この少年の半分は――。

南里 兎か。

北里 いや、エーテルだ。

人道所長 エーテル？

北里 エーテルの臭いがする。

南里 実験室の臭いか。

人道所長 いや、こいつは宇宙の臭いだ。

馬鹿 誰かが、さきにこのレントゲン室に入っています、この伝説の病いの検疫室に。誰だ、出て来い！

青年アポロがでてくる。

宇宙音が流れる。

アポロ 私はまだ飛べます。レントゲンはやめて下さい。どうして私が検疫を受けなければならぬんですか。

南里 所長、レントゲンの回路の故障です。

アポロ もうあと九時間もすれば、月へ降りられるんじゃないですか！ 私の体にウイルスはありません。そんなものに感染していません。

北里 ヒューズでもとんだか？

人道所長 いや、違う。レントゲンのあばら骨が一本なくなったんだ。

北里 なんですって。

人道所長 見ろ、時間が畸形きけいしていくぞ。

ハイエルダール こちら、アルテミス3号、感度いかが？

北里 アルテミス3号？

南里 回路が混線している。

人道所長 なんだ、アルテミス3号とは。

馬鹿 アポロ11号の双子衛星です。

人道所長 なに？

馬鹿 地球へ戻れなくなった宇宙船です。

アポロ 月が独立していこうという記念日、ぬきとられたあばら骨の時刻に俺の記憶は蛇行だこうした。

ハイエルダール こちら、アルテミス3号、骨は生きている。

アポロ こちら、アポロ11号、感度良好。

ハイエルダール 百万年ぶんのあばら骨と一緒に、まっくろいパチンコ玉の中に捨ておかれた、忘れるな、アポロ 11号、俺は、パチンコ玉の中を飛んでいる。

アポロ 了解。肉は腐れ落ちようとも骨は生きている。ヒューストン、ヒューストン、骨は飛んでいる。

北里 所長、回路がつなりました。

宇宙の雑音おさまるも、そのまま宇宙音続く。

南里 修理に三十分かかりました。

人道所長 伝説は逆流しなかったか。

北里 くいとめました。

人道所長 くいとめたか。

マイク声 ヒューストン、ヒューストン、修理完了。予定通り、着陸態勢に入ります。

いつしか、アポロは、半人半兎のブリアンの上におおいかぶさるように、そこに倒れている。

そこは、一気に「月面」となる。

人道所長、北里、南里は、そのまま月面着陸に成功した三人の宇宙飛行士となる。

ハイエルダールと馬鹿はいなくなっている。

人道所長――宇宙飛行士1

北里――宇宙飛行士2

南里――宇宙飛行士3

ロケットの激しいエンジン音。

マイク声 高度二百四十メートル。沈下速度毎秒九メートル。

マイク声 高度七十メートル。沈下速度毎秒二・五メートル。

マイク声 高度九メートル。沈下速度毎秒〇・七五メートル。

マイク声 高度二メートル。沈下速度毎秒〇・一メートル。……エンジン停止！

宇宙飛行士2 月面北緯 0 45' 56"、東経 23 27' 40"。静かの海に着陸。

宇宙飛行士1 この一步は小さいが、人類にとっては偉大な躍進だ。

宇宙飛行士2 月面には、小さな、キララツとするものがある。

宇宙飛行士1 なんだ。

宇宙飛行士2 どうも、こいつは、茶色がかつた雲母うんものようだ。

宇宙飛行士1 了解。

宇宙飛行士3 向うに見える豊かの海には、長さ百二十メートルほどのクレーターがある。

宇宙飛行士2 あまり、豊かそうには見えない。

宇宙飛行士1 ヒューズトン、これより月面標本採集の作業に入ります。

宇宙飛行士2 見ろ！

宇宙飛行士3 うん？

宇宙飛行士2 こいつはなんだ。

宇宙飛行士1 生物の骨のようだ。

宇宙飛行士2 骨？

宇宙飛行士1 すっかり風化しきっている。百万年は経っているだろうな、この骨は。

宇宙飛行士2 似ている。

宇宙飛行士1 うん？

宇宙飛行士2 片方の生物は、人間に似ている。

宇宙飛行士3 おい、この人間に近い生物は、あばら骨が一本ないぞ。

宇宙飛行士2 本当だ。

宇宙飛行士1 もしかしたら、こいつは本当に百万年前に月面へ降りた人類かもしれないぞ。

宇宙飛行士3 馬鹿げている。

宇宙飛行士2 では、どうして骨が一本足りないんだ。

宇宙飛行士1 誰かが持ち帰ったのかもしれない。

宇宙飛行士3 (ブリアンと月の兎を見つけて) よく見ろ。こいつも奇妙だ。半分人間で……。

宇宙飛行士1 もう半分は？

宇宙飛行士3 獣みたいだ。

宇宙飛行士1 人間の骨と獣の骨とが、宇宙の風にカタカタと音を立てながら、入り混じっ

ている。

宇宙飛行士2 もしかしたら、この骨はまだ生きているのかもしれない。

宇宙飛行士3 地球へ持って帰るか。

宇宙飛行士1 よせ、我々までが足をひっぱられてはたまらない。

三人、無重力で、ふわりふわりと立ち去って行く。

遠くに、紫式部と清少納言が、そそ楚々と現われる。

清少納言 ほら、御覧なさい式部様。

紫式部 え？

清少納言 今日地球が見頃よ。

紫式部 満地球でございましたかしら？

清少納言 いいえ、まだ満地球にはいたりません。上弦の地球ですわ。

紫式部 でも、お清ちゃん。

清少納言 なあに、ムラちゃん。

紫式部 あの天体のことを、どうして地球って呼ぶのかしら。

清少納言 なんでもまた？

紫式部 だって、あの星は月と違って地面より水の方が多いっていうじゃない？

清少納言 うん。

紫式部 水球って呼べばよさそうなものをね。

清少納言 きつと地面を歩くのがのさばってんのよ。

紫式部 のぼせあがるんじやねえよ！

清少納言 え？

紫式部 人類を叱咤しったしたの。

清少納言 でも、のぼせあがっているうちに、ほら、あんなにみるみる小さくなったよ。

紫式部 手遅れかしら。あれ。

清少納言 みんなそう言うわね。

紫式部 明日、目を醒さました頃には消えているかもしれないのね。

清少納言 見納めね。(望遠鏡を逆さに覗のぞく)

紫式部 (ライターで火をつける)

清少納言 なにしてんの？

紫式部 目に焼きつけてんの。

清少納言 あ！ 地球が消えた。

二人、じいっと地球を見ている。

同時に、「骨」だったはずのアポロが、寝転んだまま望遠鏡で月を見ている。

アポロ あ！ 月が消えた。

朝の光、朝の音。

アポロ 朝だものな。星は、一晩で滅びて、一晩で生まれ変わるのか。

「骨」だったはずのアポロと兎が、まるで一晩同じふとんの中で眠っていたような朝。

ビクツとはね起きる兎。

ブリアン少年はいない。

アポロ はじめまして。

月の兎 え？……はじめまして。(フトンの外へ出ようとする)

アポロ いいよ、そのまま。

月の兎 でも、見知らぬ人のフトンで、こんな。

アポロ 気にしないでいい。

月の兎 あたし達、昨日、同じフトンに寝たんですか？

アポロ ああ。でも、なんだか寝つかれなくて。

月の兎 寝相悪かった、あたし？

アポロ なんだから、折り重なって眠っていたみたいです。……それで……いけないこととは知りながら、月あかりでついつい……。

月の兎 なにをしたの？

アポロ 寝顔を見たんです。

月の兎 あ、そう。

アポロ そしたら、なんだか、はじめて会った女には思えなくなってきて……それで……いけないこととは知りながら……。

月の兎 なにをしたの!?

アポロ いつまでも寝顔を見ていました。僕の名前を知ってるかい、ア……。

月の兎 アポロ。

アポロ え!? そうだよ、職業は、ボ……。

月の兎 ボクサー、一勝百二十七敗百二十三KO負け二タオールバスタオール一罵声^{ばせい}。

アポロ 初めて会ったのに……一体、いつ出会ったんだろう。

月の兎 こういうことって本当にあるのね。

アポロ あ、まだ起きない方が良い。

月の兎 どうしたの？ あたし。

アポロ 綱から落ちた。

月の兎 綱？

アポロ あの曲芸は難しいから無理もない、と、団長が言ってました。

月の兎 曲芸？

アポロ サークスの芸人ならば、誰もが一度はのぞんでみる伝説の技だそうだ。

月の兎 どんな技なの？

アポロ 綱に足の裏をつけないで、綱を渡るといふ至難の技だ。

月の兎 そんなことができるの？

アポロ 十人に十人は失敗する。だから、みんな挑むのさ。そして、みんな落ちていくんだ。

月の兎 あたしはどこへ落ちたの？

アポロ 見ていた僕の頭の上。それで、ついつい、ムラムラツと。

月の兎 なにをしたの？

アポロ 看病したんです。

月の兎 思い出したわ、だんだん。落ちていく時の事を、一部始終。二十メートルの綱の高さから、地面へ落ちていく間のこと。

アポロ 落ちる前のことは？

月の兎 全部忘れた。覚えているのは、落ちている間のことだけ。

アポロ 珍しい記憶の回復の仕方だ。ねえ……。

月の兎 なあに？

アポロ 聞いていいかい？

月の兎 なにをよ。

アポロ 高い所から墜落していく、その数秒の間に、どんなものを見るのか。昔、飛び降り自殺したやつに、聞いたことがあるんだけど、死んだ後で答えてくれないんだ。それで今度は、これから飛び降り自殺する奴に聞いたんだ。

月の兎 そしたら？

アポロ わからないっていうんだよ。

月の兎 あたしは、地面にこの体が届く一ミリメートル手前のことまで覚えてる。

アポロ どんなテーマ？

月の兎 芸人の一生。

アポロ どんなんだった？

月の兎 やっぱ曲馬団にいるの。

アポロ ふうん、つまんねえな。

月の兎 ただ、人じゃなくて曲馬団の兎なの。

アポロ 兎？

月の兎 うん。

アポロ あはは。

ドロ、ドロ、ドロの音。

月の兎 レデース・アンド・ジェントルマン、皆様の目の前にお目見得いたしましたる一匹の兎、これより、この兎が、どんなものでも手を触れますれば、またたくまに氷に変えてしまうという、この月の輪をくぐり、あっ、と思えばいつのまにかこの兎、見事、美しき少年の姿へと転じます。題して「イカルスの月の輪くぐり」。

ドロ、ドロ、ドロの音、高まる。

月の兎 氷りついた月の輪を、えいっとばかりに私がくぐる。そこで地面へもぐる。地面から少年が飛び出る。まるで、空中で、兎の私と少年とがすり変わったように。(成功しましたという、あの両手を広げる仕草)「イカルスの月の輪くぐり」でございました。

うまくいった時の拍手喝采^{かっさい}。

月の兎 そして拍手をもらうのは、少年ばかり。

アポロ それでどうした。

月の兎 はつきり言って、ひねくれたね。

アポロ どういうことした？

月の兎 スカート下げて、歌舞伎町を歩いた。

アポロ 兎が。

月の兎 そこである晩、私は思いついたのよ。本当に私が、少年とすり変ってやろうって。

アポロ どうしたんだい？

月の兎 そのイカルスつて相手役が、地面を蹴^けって宙へ飛び出す時、その羽根をもちで、私につけたのさ。そして――。

アポロ 太陽へ向ったのか。

月の兎 いいや、月へさ。

アポロ 月に？

月の兎 うん。ところが、月があんまり冷たくて、羽根が氷っちゃって、しまいには墜落しちゃうんだ。

アポロ その墜落していく間のことを覚えているかい？

月の兎 覚えているよ。

アポロ どんなんだ。

月の兎 芸人の一生。

アポロ なんの芸人？

月の兎 やっぱり曲馬団で兎をやってるの。

アポロ 生まれ変っても変らねえんだな。もしかしたら、前世は兎じゃねえのか、あんた。

アポロ、知らず、月の兎の足を引っぱってる。

月の兎 ねえ、なんで、あんた私の足ばかりひっぱるのよ。

と、「十二単衣の君」今度は現代装束で現われます。

いやあ、考えれば考えるほど、謎^{なぞ}の人ですね。

謎の人 ごめんなさいね、それ、幼い頃からのこの子の癖なんです。「お姉ちゃん、丸い輪

になって眠ろうよう」つて。

月の兎 お姉ちゃん？

謎の人 はい。

月の兎 あのう、お姉さんなんですか？

謎の人 ええ、宇宙家族です。

月の兎 いつのまに家族を増やしたの？

アポロ 自分でも知らない間に繁殖するみたいだ。

謎の人 アルテミス上田です。女子プロレスラーやっています。

月の兎 ほんとに？

アルテミス上田 ええ。この場限りの方便で、女子プロをやっています。

月の兎 女子プロねえ。

アルテミス そうは見えないでしょう、品性が。

月の兎 とくるところ、見えます。

アルテミス 虫食ってます？ 品性。

月の兎 はい。

アルテミス すぐにでもレオタード姿をお見せしたいんですけど、レオタードになると、

リングが呼んで、「ちょっと！」つてリングが呼ぶと「ギアワウオーツ」て血が騒ぐ

でしょう。

月の兎 その血を、受けついでいながら、どうして弟のあんたは一勝百二十七敗百二十三K

○負け二タオールバスタオール罵声なのよ。

アポロ 宇宙家族の血は、繋つながってないんだ。

月の兎 どうして？

アポロ 単性生殖なんだ。

月の兎 なによ、それ。

アポロ 細胞と細胞が、足をひっぱりながら殖えていく。

月の兎 細胞まで足をひっぱるの。

アポロ そうだ。

月の兎 じゃあ、足をひっぱる人間しか生まれないじゃない、宇宙家族って。

アルテミス もう、あんたも、足をひっぱられたんでしょう。

月の兎 え？

アルテミス 宇宙家族に。

月の兎 ひきずりこまれたの、私。

アルテミス 人間が悪いわね。光栄でしょう？（指をパキポキツとならす）

月の兎 光栄です。

アルテミス バニー上田でいこうかしら。

月の兎 なんですか？ バニー上田って。

アルテミス いや、獣一にも、ボクサーなんてヤクザな仕事やめて、早く女子プロに転向し

てかたぎの暮しをしろと口を酸っぱくして言ってるんですがねえ、おお、酸っぱい。

アポロ 姉さん。この人は違うんです、女子プロ志願じゃないんです。

アルテミス どうして？ なるわよ。

アポロ なるんじゃないかって、なりたくないんです。

アルテミス なりたくない？ どうして。

アポロ　それがふつうなんです。

アルテミス　どうして？

アポロ　ふつうって意味、わかりますか？

アルテミス　赤羽―大宮間のことでしよう。

アポロ　すいません。うちの姉は、女はみんな女子プロレスラーに憧^{あこが}れていると思っ
ています。

アルテミス　わかんない子ねえ。

アポロ　わかんないのは、どっちです。

月の兎　姉弟げんかはやめなさいよ。

電線の上のぼり、アポロはまるでプロレスでもやっているかのように飛び降りよう

とする。それをなだめるように蒲団^{ふとん}から立ち上る兎。

と、兎の尻は、ちょうどいつかの半人半兎のように、毛布がふくれている。

アポロ　どうしたんだい、その尻？……あ！（と綱から落下）
月の兎　え？

その兎の毛布がパラリと落ちると、その中から少年ブリアン。

あれっという間に、その毛布に月の兎はくるまれて消えてしまう。

やがてアポロはおとなしく、その蒲団の中へくるまれて眠る。

アルテミスは、ハイエルダールとなっている。

すなわち、

半人前の兎―↓半人前の少年

アポロ―↓アポロ

アルテミス―↓ハイエルダール

となる。

ブリアン　いくよ、ハイエルダール。

ハイエルダール　いいぞ。

ブリアン　わに。

二人、相手の尻を追いながら、ぐるぐる回る。

ハイエルダール　にしきへび。

ブリアン　ビーバー。

ハイエルダール　バシリスク。

ブリアン クマ。

ハイエルダール まんとひひ。

ブリアン ひ、ひ、ひつじ。

ハイエルダール ジ、ジ、ジャガー。

ブリアン ガ、が、が、蛾^が。

ハイエルダール そいつは獣じゃない。

ブリアン ガ、が、ガラパゴスぞうがめ。

ハイエルダール そんなの、いるか。

ブリアン いるか？ か、か、か、かわうそ。

ハイエルダール うそだって言ってるんだ。

ブリアン だ、だ、だ、だ、だちよう。

ハイエルダール う、う、う、う、うさぎ。

ブリアン うさぎ、ぎ、ぎ、ぎ、ぎ、ぎーイツ。

ハイエルダール ストップ！ と、その兎の尻のところまできて、いつも急ブレーキがかか
るな。

ブリアン うん。

ハイエルダール どうも、すばしこくて、兎の尻はつかみにくい。

アポロ なにしてるんだい？

なにが起ったのかわからず呆然としているアポロ。

ハイエルダール 目が醒めていたのか。

アポロ え？

ハイエルダール 夢のしりとりだ。

アポロ 夢の？……俺はずっと目は醒めていた。

ブリアン 目を開けたまま眠っていたのかい？

ハイエルダール わにの夢の尻をしきへびが見て、にしきへびの夢の尻をビーバーがまる
のみにして、そのビーバーの夢のケツにバシリスクがかじりつく。こうして最後に、い
つも、いつも、うさぎの夢の尻を見てとる獣のところ、夢のしりとりは終ってしま
う。

アポロ うさぎの夢の尻にかじりつく獣？

ハイエルダール そいつがどうも見つかからない。

ブリアン まだ起きない方がいい。

アポロ どうしたんだい、俺？

ブリアン 綱から落ちた。

アポロ 綱？

ブリアン ああいう芸当を見せてもらったのは、初めてだ。
アポロ 芸当？

ブリアン コーナーの柱によじのぼり、右、左を見て安全を確かめ、綱を渡って、飛び降り
た。

アポロ 俺、プロレスラーか？

ハイエルダール ボクサーだから、ほとほと困る。

アポロ 俺はどこへ落ちたんだ。

ブリアン 僕の頭の上、それでついつい……。

アポロ 何をしたんだ。

ブリアン 看病したんだ。

アポロ 思い出した。

ハイエルダール なんだい。

アポロ 兎の夢は、そこから始まった。そして、俺がその夢の尻のところ……姉ちゃん。

ハイエルダール 気持ち悪い奴だなあ。

アポロ と、姉弟げんかの最中に兎の尻にとびつこうとした。とたん……。

ブリアン どうしたんだい？

アポロ いてててつ。

ハイエルダール 兎の夢なんだろう？

アポロ ああ。

ハイエルダール いつのまに、お前の夢になったんだ。

アポロ いてててつ。

ブリアン 起きあがらない方がいい。

アポロ そんなにひどいのか。

ブリアン 胸に……。

アポロ なんだい。

ブリアン いや、いいよ。

アポロ 思わせぶりすんな。

ブリアン 胸に……かわいそうでいえない。

アポロ ガ、ガ、ガンなのか、俺。

ブリアン そんな軽い病気じゃない。

アポロ え？

ハイエルダール いや、なんのことはない。あばらが一本ねえんだ。

アポロ あばらがない？

ハイエルダール ああ、消えちまったらしい。捜したんだけどなあ。

ブリアン うん。

ハイエルダール 気にするな。

アポロ 気にするな!?

ハイエルダール ほら、俺だって、ここんところ。(口を開けて) 歯がないだろう。

アポロ あばらだぞ。

ハイエルダール あばらだよ。

アポロ 俺のあばらだぞ。生まれてこのかた、どこへも行っただことのない、あばら骨が?

書き置きもしないで、どこへ行っちゃったんだ。こんなことをしている場合じゃない。とりかえしてくる。あばら——、あばら——、いててっ。(胸をおさえる)

ハイエルダール 待てよ。

アポロ え?

ハイエルダール 誰からとりかえすんだ?

アポロ 骨を盗んだ奴からだよ。

ハイエルダール いないよ。そんな奴。

ブリアン ちょっと! そのところどいてくれ。(大きな木を運んでくる)

またしても、呆気にとられるアポロ。

アポロ 何をしてるんだ。

ブリアン さつき、いいブツを見つけておいたんだ。

ハイエルダール また、禁じられた遊びか?

アポロ 十字架でも集めてんのか、こいつ。

ハイエルダール 町から電信柱を集めてくる高級な趣味だ。

アポロ 電信柱?

ブリアン うん。

アポロ おい、これ、切っちゃったのか。

ブリアン うん。

アポロ うんって、お前、まずいぞ。むやみやたらに。

ブリアン むやみやたらじゃないさ。コンクリートの電信柱はダメだ。ノコギリの歯がたたないし、だいいち、水に沈んじゃうから。杉の木の、それもヒマラヤがいい。クマノも悪くない。ほどよく浮かぶ。

アポロ 電信柱は、水に浮かべるものじゃない。

ブリアン どうするものなんだ?

アポロ NHKを聞くためのものだ。

ブリアン そんなところからひとつも話は聞こえて来ない。こうするんだ。(太い丸太に耳をあてる)

アポロ え?

ブリアン な?

アポロ なにが。

ブリアン 聞こえるだろう、いろんな話が。

アポロ うん？

ブリアン ヒマラヤ杉からはヒマラヤの雪男、雪女、もろもろ。クマノの杉からはスサノオ

の命の伝説。みこと

アポロ そんなものを集めて、どうするんだ。

ブリアン この伝説の電信柱たちを葦あしのひもでくくりつけて、その上に病葉わくらばをしいて、筏いかだが

できたら、この琥珀色した運河を漂流していくんだ、十三・五人の少年を捜して。

アポロ 十三・五人？

ブリアン 行きは十五人だったんだが、帰りは縮んじやったんだ。

アポロ できたのか、その筏。

ブリアン それが……。

アポロ なんだい。

ハイエルダール パピルスの船から宇宙船まで、船も進化をしてきたけれども、どんな船の

骨組にも、船を守るために、肋骨ろっこつという、母親のように船をくるんでくれる、あばら

骨があるんだ。

アポロ それで？

ブリアン それがまだない。あばら骨になる電信柱がみつからなくて……。

ハイエルダール 捜しちゃいるんだがなあ。

アポロ なんだよ、その目。

ブリアン たった一本なんだけどなあ、あばら骨……。

ハイエルダール たった一本だったよねえ……。

アポロ 冗談じゃねえ。俺はただでさえ一本ないんだぞ。

ブリアン 誰がくれるって言ったよ。あんたの体ごと、船のあばら骨になってくれればいい

んだ。さすれば、向うところ敵なしでござい、てなもんだ。

アポロ 敵って誰だよ？

ブリアン 十五少年を締めちまった奴さ。

アポロ 俺は自分のあばら骨一本で精一杯だ。こっちにあばよ！ あっちにあばら！ あば

ら！ あば……ら……。

走り去って行こうとするアポロに、立ちほだかるハイエルダール。

ハイエルダール こんなにも、この子がナケナシの頼みをしているんじゃないか。そんなに

持ち合わせてるもんじゃないんだよ、少年の頼みとタクシーのおつりは、お客さん。

ブリアン もうじき、いいあばら骨を見つけてくるから。それまででいいんだよ。

アポロ もうじき？

ハイエルダール もうじきっていう時期がくるまでなんだろう？

ブリアン うん。

ハイエルダール それまででいいんだろう？

ブリアン うん。

ハイエルダール 健気な頼みだねえ。

ブリアン なんなら、持ってきたあばらのかけらぐらい、あげてもいいんだ。そいつを胸にうめちまいなよ。

ハイエルダール うん、うん。それがいい。そしたら、この筏のあばらと、お前のあばらが兄弟になって、晴れて原始家族だ。さあ、フォークダンスを踊ろう。

アポロ そんなものに踊らされるか。

ハイエルダール いや、太鼓にあわせて踊らされるっていつてるんじゃない。太古に向けて踊ろうって。

アポロ 太古？ 俺は宇宙家族だ。

ハイエルダール 宇宙家族？

アポロ (ボクサーのファイトポーズ) 俺の左ジャブは宇宙の風を呼んだ。右ストレートは白色ワイ星を吹つとばし、シリウスを叩きつぶしたんだ。鮮烈なデビューを飾ったんだ。ハイエルダール いつのことだい？

アポロ おとといの夜の後樂園でさ。アポロ獣一、日本ジュニアフライ級新人王決定戦。一戦一勝零敗、一KO勝ち、勝率十割だ。見ろよ、"宇宙の風を呼ぶ男"だ。(新聞をとり出しつくづくと眺める)

しばし、その新聞を見る。

ハイエルダール ほんとだよ！

ブリアン え？ どこだい。

ハイエルダール ここだ、見てごらん。写真まで載ってる、白黒で。

ブリアン 大口開けて笑ってる。

ハイエルダール 歯と歯の隙間に、ハウレン草と育ちが見えるな。

ブリアン 歯はみがいしておけよ、兄ちゃん。

アポロ 兄ちゃん？

ハイエルダール そうか、獣一。立派になって帰ってきたなあ。もう少し、ゆっくりしていきるといいのになあ。

ブリアン 無理にひきとめちゃ悪いよ。小遣いをくれて言ってるみたいで、父ちゃん。

アポロ 父ちゃん？

ハイエルダール これ、ほら、ジムのマネージャーさんに。田舎のみやげだって、オレンジ。アポロ ちょっと待ってくれよ。

ハイエルダール 何時の汽車で行くんだい？

アポロ 汽車？

ハイエルダール え？ ロケットかい？

アポロ いや。

ブリアン 僕が送っていく。

アポロ いや、あの、その……ちよつと……。

ハイエルダール 行くんなら早くお行き！ さつき「あばよ！」って、そっけなく言ったんだから。

アポロ いや、その、行くには行きますが……。

ハイエルダール なんだ。

アポロ なにかこう、後に残していくものが、もやもやつと。

ハイエルダール なんだい。

アポロ 誰かが、また、俺の夢の尻にでもかじりついたんじゃないか。

ハイエルダール え!? じゃあ、もう二、三百万年、ここにいるかい？

アポロ いや、その……。

ハイエルダール どうするんだい？

アポロ 行くよ。あばらがスーツケースをその手に、待っているんだ、駅の上りホームで。

(行きかける)

ハイエルダール そうかい……。

アポロ あばよ！（行きかける）

ハイエルダール 忘れるなよ獣一。

アポロ ギクッ。

ハイエルダール フルサトをだよ。

アポロ また、なにを言われるのかと思った。

ハイエルダール 宇宙家族アポロは、原始家族と背中合わせの双なりふたでございまして。ア

ジノフライ級チャンピオンになったら、世間様に、胸はってそう言うんだぞ。「正面は、宇宙を向いているけれど、背中には、太古をしょってます。そいつに合わせて、パンチを繰り出しているんじゃない。太古に向ってカウンターしてるんだ」そう言うてやれ。今宵こよひは、お前と月の独立記念日だ。

電信柱に耳をつけていたブリアン少年。

ブリアン うさぎの後の話が聞こえる。

ハイエルダール うん？

ブリアン うさぎの夢のその尻を食った奴。

ハイエルダール うさぎ？

ブリアン　ギリシア。

ハイエルダール　ギリシア？

ブリアン　アポロ。

リングアナウンサー　日本ジュニアフライ級ランキング第三位アポロ獣一。百二十八戦百二

十七勝一敗百二十四KO勝ち。

うっすらと、ボクシングの歓声が聞こえてくる。

アポロは一方的に攻勢である。アポロの夢が見えてくる。

アポロ　左ジャブ……ジャブ。右カウンター、ボディーだ。ボディーに入った。……ジャブ、ジャブ……ひじが高い。ジャブを忘れるな……そこだ、右ストレート………に入った、一気に駆け、ラッシュだ。ラッシュをかける。ワン、ツー、右ストレート、ボディー、ボディー、あごに入った。もうじきだ、タイトルが手に入る。宇宙の風を切る右ストレートが宇宙のチリアクタを、俺の体にすいつけてくる。俺はみるみる大きな惑星になっていく。見る、宇宙の嵐だ。ワン、ツー、ワン、ツー、右フック、左ストレート、ワン、ツー、ボディー、左アッパー、右フック、連打、連打、ボディー、よし右ストレート、フィニッシュだ。うっ！（胸を押さえる）なんだ、胸の中で、何か動いているんだ、動くな。

アポロ、スローモーションで一方的に打たれていく。

アポロ　誰だ、俺の胸に入りこんで、あばらを抜きとった奴は。代りに、なにを埋めこんだんだ。地球？　嘘をつけ、地球を埋めこんだっていうのか、動くな！　俺の胸の中で……青い地球。

やがて胸を押さえながら、そこに倒れこむアポロ。ハイエルダールとブリアンはいなくなっている。人道所長ら四人が、さっと入ってくる。

北里　所長、兎の伝説はこんなところへ迷いこんでいました。

人道所長　どこだ。

北里　（蒲団を示して）ここです。

人道所長　伝説が、蒲団を被っているのか。

南里　はい。

人道所長　暑そうだ、とってやれ。

蒲団を剥ぐと。そこに「月の兎」が、ごろんと横たわっている。

人道所長 まちがいない、半分、人になりかかっている。危ないところだった。

南里 確かに節電の病いだな。

北里 この兎、輪っかを握っている。

南里 この輪をくぐりながら、どんな人間とすり代わろうとしたんだろう、獣から人へ。

北里 この兎もまた、他の獣同様、自分のこの夢の尻を食ってくれるやつのことを捜していたんでしようか。

人道所長 大方、人間の子供にでもなりたかったんじゃねえか。しかし、自分達の尻の肉を、次々と食わせながら伝染させていき、やがて、獣から人へすりかわろうとしていたこの獣たちのたくらみもこれで終りだ。

人道所長 うさぎの後は、もう、どんな獣も続かないだろう。

北里 どうしてですか？

人道所長 こくら辺りの獣は、みんな死に絶えた。こいつが最後だ。こいつがどんな夢を見ようと、こいつの尻を食おうなんて、殊勝な獣は……。

南里 所長！ 見て下さい、この兎の尻を。

北里 あ！

人道所長 誰だ、誰が食ったんだ、こいつの尻を。

北里 この節電の病いは、まだ続いていくのか。

人道所長 最近、街で、獣が歩いているのを見かけたか。

北里 いいえ。

馬鹿 私は動物園で。

北里 あれは、ぬいぐるみだ。

人道所長 もう、猫の子一匹、獣はいないはずだが。

馬鹿 いえ！

人道所長 どうした。

馬鹿 猫がいます。

人道所長 どこに。

馬鹿 あそこです！（アポロを示す）

南里 確かに猫の泣き声が聞こえます。

人道所長 赤ん坊かなにかの泣き声だろう。

馬鹿 いいえ、ほら。

人道所長 なんだ。

馬鹿 近づけば、（倒れていたアポロ、すつと後ずさり）身をすつと後ずさるのは、赤ん坊ではありません、獣です。

南里 これも、節電の病いでしょうか。

人道所長 いや、伝説が食いつき返したんだ。

南里 は？

人道所長 うさぎの尻を、ギリシアという伝説が食いついて。

北里 ギリシア。

人道所長 アポロ。

北里 アポロ？

南里 アポロの口は？

人道所長 思わぬところへ、話が漏れた。

北里 では、これは節電の病いではなくて……。

馬鹿 ロ、ロ、ロ……。漏電の病いだ！

人道所長 追え、漏電の病いを。

北里、南里、アポロの後を追う。

馬鹿、人道所長去る。

とたんに、みやび雅やかな御殿の風景がひらけてくる。

紫式部と清少納言との二手に、女官達は分れて、いにしえの歌合せ大会のようなもの
を始める。百人一首を詠みあげるように。

女官1 読み人知らず。犬が人にとりつかれますれば。

紫式部 はい！（札をとってみせる。その札には「伏」と書いてある）よだれをたらし、うつ

「伏」せとなります。

清少納言 おみごと。

紫式部 狂犬病にございます。

女官1 読み人知らず。象が人にとりつかれますれば。

紫式部 はい！（「像」の札をとる）

清少納言 くそお！

紫式部 人前に、わが自画「像」をさらし、見せものとなります。

清少納言 お、おみごとねえ……。

紫式部 エレファント・マンのことでございます。ほほ……。

女官1 羊、人に化ければ。

紫式部 はい！（「佯」ようの札をとる）

清少納言 あんたばっか！

紫式部 一見、おとなしゅうは見ゆれども、それは「佯」邪と申しまして、うそ、いつわり

でございます。

清少納言 式部様、おみごとねえ。

紫式部 ほほほ……。少納言様の才覚に比べますれば……と、これが佯邪にございます。

女官1 狼、人に化ければ。おおかみ

清少納言 はい。(横文字の札をとる)

紫式部 あ、横文字のカードをとった。

清少納言 狼、人にとりつかれるを、リカントロピア。

女官1 牛、人に化ければ。

清少納言 ミノタウロス。

女官1 馬、人に化ければ。

清少納言 ケンタウロス。

女官1 亀、人に化ければ。

清少納言 ウラシマタロウス。

紫式部 半分、嘘に聞こえるわね。

清少納言 半分は嘘です。

紫式部 ま!

清少納言 なにせ、半分が人で、半分が獣という、半分だらけのお話でございますから。

二 雅楽なりひびく。十二単衣の君、現われる。見れば、十二単衣の君は、薙刀をその手に、たすきがけという姿である。ひとえ

紫式部 そのお姿、いかがなされました。

十二単衣の君 雅な宴に水をさすではないけれども、決して館の外へは出ぬよう、しもじも

の者どもにまでも、くれぐれも仰せつけること、お頼み申しますよ。やかた

清少納言 どうなさいました?

十二単衣の君 ついその羅生門のところでも、今、また、骨だおれがあるを見ました。らしやうもん

清少納言 今日はもう、ふた組めにございますね。

紫式部 それにしても、そのいでたちは……。

十二単衣の君 疫病と叛乱というのは、いつの世も、同じ蒲団で寝ています。ふとん

紫式部 と申しますと……。

十二単衣の君 はい。

清少納言 どこぞで、この疫病に乗じて叛乱が。

十二単衣の君 はい。

紫式部 この「うずらの里」に叛乱軍が?

十二単衣の君 はい。

紫式部 どこのだいつらにございます?

十二単衣の君 ヒトです。

紫式部 ヒト? 今、私共が、この百獣一首でもあそびました、人畜生のヒトのございますか?

ございますか?

十二単衣の君 はい。

紫式部 まさか。

清少納言 人畜生といえ、地球に棲すむと言われる空想の動物ではございませんか。

十二単衣の君 ええ、今でこそ、あの地球というのは、あんなにか細かいカマキリのようにな
ってしまいましたけれども、古代は、この月と同じ大きさで、ふっくらとまんまるだ
ったのでございます。

清少納言 あの地球が？

紫式部 変れば変わるものねえ、お清ちゃんと地球。

清少納言 ま！

十二単衣の君 エラクなまいきな奴でね。

紫式部 どのように？

十二単衣の君 どのように？

紫式部 は？

十二単衣の君 は？

紫式部 私がうかがっているのでございます。

十二単衣の君 私がうかがっているのでございます。

紫式部 いかげなされました。

十二単衣の君 いかげなされました……と、まあ、なにからなにまで、地球は月の真似をす
るのでございます。

清少納言 では、こちらで疫病が流行はやれば……。

紫式部 やはりあちらでも疫病が流行る。

清少納言 あったま、きちやう。

十二単衣の君 あったま、きちやう。

清少納言 んもう。

十二単衣の君 んもう……と、こちらが腹を立てれば立てるほど、敵の思う壺いづかでございます。
そこである日、血みどろの戦いくさがおこりました。

紫式部 勝ちましたのか。

十二単衣の君 勝ちました。

紫式部 どのようにして？

十二単衣の君 こうです。(自分の頭を叩たたく)こちら側は少しも痛くないんですが、地球はえ
らく痛がりましたね。

清少納言 それで、どういたしました？

十二単衣の君 鏡の中へ、ヒトを閉じこめたんです。

紫式部 それで？

十二単衣の君 あたし達の一挙手一投足を真似するようにと。

紫式部 あ、それで、いまだに鏡の中で猿真似を。

十二単衣の君 そのつもりが……。

紫式部 そのつもりが？

清少納言 でも、本当でしょうか。

十二単衣の君 半分ね。

清少納言 え？

十二単衣の君 半分だらけの話とは、少納言が申したのでしよう。

奥の方で、「出会ええ！」「出会ええ！」「クセモノゾ！」の声。女官たち、毅然と立ちあがり、手に薙刀、たすきがけ。

と、人道所長ら四人、現われる。少々、身なりは違っている。

人道所長――畜生道入道

北里――東里の君

南里――西里の君

馬鹿――鹿馬

と、平安貴族のいでたちである。

十二単衣の君 これは、これは、畜生道入道。

畜生道入道 いや、ぶしつけの乱入、ひらにお許しを。東里の君、ぬかりないな。

東里の君 はい。おおかたの門は閉ざしました。そちらはいかに、西里の君。

西里の君 一条から南、九条より北、しらみつぶしにいたしましたが残るは、この館しか
ございません。

紫式部 いったい、いかがなされました？

十二単衣の君 男子、これより入るべからずの札が見えませなんだか？

畜生道入道 いいや、それが、我等より先に、どうも、その入ってはならないオスが、この

館へ紛れこんだよう。

紫式部 紛れこんだ？

清少納言 オスが？

紫式部 うれしい。

清少納言 と申しますと？

東里の君 疫病に罹りしおのこひとり、この館に入りし疑いあり。

清少納言 病いもちが？

紫式部 うれしい。

畜生道入道 少々、今度の疫病は、厄介にございます。

兎の君 畜生道入道の手をもってしてもか？

その声の方向を見ると、いつしか「月の兎」が、「兎の君」となって、そこに坐って

いる。

畜生道入道 手？

兎の君 いや、前足。

畜生道入道 そこなる君は、御懐妊にあられるか。

兎の君 なにをかばな。

鹿馬 呼んだ？

東里の君 誰も呼んでない。

畜生道入道 いえ、その背中のハラボテが気になって。

兎の君は、その十二単衣の背中に、ひとりの男をかくまっている。つまりは、二人羽

織。そして、よくよく見れば、兎の君は、その男に完全に操られている。

むろん、その男はアポロである。

西里の君 まさかこいつ親切心を起して、その後ろに……。

兎の君 そんな気持は毛頭……。

女官1 (百獣一首をその手に) 人の為にするを……。

紫式部 (札を取る) はい。

清少納言 くそお。

紫式部 「偽いつわり」と申します。

畜生道入道 そのことは十分承知のことか。

兎の君 ええ。愛は破れても、親切は勝つ。

畜生道入道 いつもかい？

兎の君 いつもです。

畜生道入道 鹿馬。

鹿馬 ……………。

畜生道入道 呼んだんだ。

鹿馬 はい。

畜生道入道 今回の疫病の調査報告をしろ！

鹿馬 はい。

畜生道入道 ぐらしむきは？

鹿馬 まず、朝、目を覚まします。

畜生道入道 どちらの目から。

鹿馬 まあ、それぞれです。

畜生道入道 無謀だ。

鹿馬 やがて、丸っこい手で顔をかきまげ、長い舌で足をなめると、お尻をふって、虫や草

を食べ、川面^{かわも}で身づくろいをし、木に登り、草原を駆け、水浴びをし、夜になれば、交尾して、目をつぶるのでございます。

畜生道入道 どちらの目から。

鹿馬 まあ、それぞれです。

畜生道入道 無謀だ。

十二単衣の君 しかし、聞けば聞くほど、普通の話でございますね。

畜生道入道 確かに、我々がその生活をすれば、の話だ。

西里の君 ということは？

畜生道入道 この疫病には、我々は罹らないんだ。

東里の君 誰がかかるんです。

畜生道入道 ヒトだ。

東里の君 ヒト？

十二単衣の君 そのヒトが、この館に逃げこんだと申すのか。

畜生道入道 さよう。隠れホモがいるはずです。

清少納言 しかし、どうやってまた、鏡の中から、ここまで……。

十二単衣の君 御存じないかい、式部、少納言。

紫式部・清少納言 なにをです。

十二単衣の君 その昔、十五頭の兎が、このかぐろき宇宙を漂流していた話を。

紫式部 私のミナモト物語には、まだ……。

清少納言 私のマクラノクサコにも、まだ……。

十二単衣の君 それは、あの地球が月の影に入ってしまった、ふくろうやコウモリ達が、今宵のような宴を催していた夜のことだ。その鏡に光のあたりぬをいいことに、地球に棲

む人畜生の野郎は、何を思ったか十五頭の兎たちと、百五十億のバイキンと。

兎の君（アポロの声）（叫ぶ）人がひとり！

清少納言 え！

十二単衣の君 そう、人もひとり、アラガネでできたうつぼの中へつめこんで、こちらへ送りつけてきたんだよ。

兎の君（アポロの声）こちら、アルテミス3号、了解。（明らかに操っているアポロの声に変わる）

紫式部 うけとってやらなかったのでございますか？

十二単衣の君 しぶしぶ、うけとつてやろうかなあ——と思った矢先、うつぼの舟は、どんな思わぬ方へ流れ出した。

兎の君（アポロの声）こちら、アルテミス3号。ヒューストン、ヒューストン。応答を願います。……ヒューストン、ヒューストン、こちらアルテミス3号。軌道修正を願います。ヒューストン、ヒューストン。

十二単衣の君 ひとたび、その宇宙の潮の流れからはずれた船は、どんどんどんどん流され

ていった。みるみる地球は遠ざかり、まるで地球はパチンコ玉のように小さくなっていった。

東里の君 宇宙の果てへ？

十二単衣の君 そう、琥珀こはくの運河を流れて。

西里の君 二度と帰れなくなった。

兎の君 ところが、兎は帰ってきた！（忽然と立ち上り、素早く動く。むろんアポロが後ろで、文楽の人形のように動かしている）

東里の君 どうしたんだ、こいつ？

アポロが声を出しているに変わりがないが、（つぶや 呟くような声である。

兎の君（アポロの声） こちらアポロ 11号、ヒューストン、ヒューストン、感度はいかが？

……ヒューストン……マリリン山から、豊かの海を越えて、やがて、北緯 0° 45' 56"、東経 23° 27' 40"。月面は静かの海に着陸した。いいえ、私も月面に舞い降りる誇り高き天人の一人となるはずでした。異常が起ったのは、着陸九時間前のことでした。宇宙母船アポロ号から月面着陸イーグル号の連結のバルブが、はずされた時のこと、突如船内にある電気系統の回路という回路が負から正へと逆流を始めました。同時に——同時に、船内に兎が入ってきました。

西里の君 兎が？

畜生道入道 確かに、兎は帰ってきたんだな！

兎の君（アポロの声） ええ、兎は帰ってきました！ 十分の一に縮んで兎は帰ってきた。

東里の君 十分の一？

兎の君（アポロの声） 十五頭の兎は、一・五頭の兎になって。

西里の君 一・五頭。

兎の君（アポロの声） 一頭の兎と、そしてもう一頭の兎は、半分は兎で、その半分は人間だ
ったんだ。

とたん、紫式部、清少納言をはじめとして、女官たちは皆な、文楽人形のような、身もかろやかな、立居振舞を始める。

それぞれの女官の装束の中には、アポロ同様黒子を着込んだ男達が入って操っている。
その中で、「十二単衣の君」ばかりは、身じろぎもせず（たなず 佇んでいる。

東里の君 こいつら、皆な、人にとりつかれている。

畜生道入道 なに。

西里の君 ヒトにつかれた半分の兎だ。

東里の君 反乱だ、疫病に乗じた反乱だ。

畜生道入道 落ち着け、これは半分だらけの話だ。半分の嘘が、どこかにころがっている。そのウイルスを捜せ。

「兎の君」ら文楽人形が、宙に舞うように、のけぞっていくなか、ゆっくりと、黒子達が顔を出す。
アポロが最後に顔をみせる。

アポロ 百五十億のウイルスにむしばまれた兎の肉を食いながら、宇宙に捨ておかれた俺は、肉が腐れおち鼻がもげようとも、ヒューストン、俺は、まだ生きているぞ。ヒューストン、みるみる地球が小さくなっていくその景色を、お前達はみたことがあるか。地球という地面に堕ちていくわけじゃないんだ。地球という美しい地面から、どんどん落ちていったんだ。紫の色したイベリアの夕べも、こがねの如く輝いたオリュンポスも、けしの花の色に染まったパレスチナの死海のあけぼのも、そのなにもかもが、この瞳ひとみから無理矢理剥はぎとられ、百億年の光が頭の上を通りすぎても、また百億年の光が続く、黒い光の中へ放り出された俺の景色が、お前に見えるかアポロ……。 (正気に戻ったように) え!? お前は誰に語っているんだ、もう一つの地球。

天女が舞うように、文楽人形と化した女官達去る。アポロも去る。

東里 追え! 漏電の病いを。

畜生道入道 いや、追うな。

西里 え?

間。

月の世界は、地球上のとある伝染病研究所に変わっている。

畜生道入道↓人道所長

東里↓北里

西里↓南里

鹿馬↓馬鹿

人道所長、北里、南里らは顕微鏡を覗いている。馬鹿だけが天体望遠鏡を覗いている。今見たことが顕微鏡の中のできごとのようである。

北里 どうしてです、ここまで、漏電の病いを追いつめておきながら。

人道所長 功をあせるな、白い巨塔。

北里 所長も御覧になったでしょう、この顕微鏡の中を。

南里 プレパラートを覗いて下さい。

人道所長 うん？

南里 伝説の病いに始まった伝染病の青写真が見えてくるでしょう。

人道所長 うん。物語の骨格がはっきりと。

北里 どうです。ウイルスの世界は。

人道所長 平安時代だ。

北里 平安時代？

馬鹿 サイキンの話なのに、平安時代か。

人道所長 みめうるわしい坊主がでてきた。

北里 そこは、とぼして。

人道所長 おっ、兎たちだ。

北里 そこです。

人道所長 兎がヒトにとりついたぞ。

北里 そうです。兎の肉に、このウイルスは潜んでいたんです、まちがいありません。

人道所長 なにが。

北里 捜していたウイルスです。こいつらは、兎に化けて宇宙からやってきたんです。

南里 北里論文を支持します。

人道所長 うん？

南里 検疫室をすりぬけた宇宙のウイルスだと思います、この漏電の病原体は。

人道所長 おい、日本脳炎。

馬鹿 え？

人道所長 君は、どう思う。

馬鹿 ジーゾと、音をたてる夏の日の遠い蠅はえの小便、コロナと寝転がった便器につまったかき氷、あの理科のエーテルの実験室でいくたびプレパラートを割って頭をこづかれたことだろう。私は思うのであります。患った日本脳炎という炎の中で、天も地もまあるい鏡の中にくらすことができたならば、ああ、このまま生きていてもいい。だから、このまま死んでしまいたい。

南里 なんだ、まあるい鏡って。

馬鹿 球の中が鏡になってるんです。

南里 それで。

馬鹿 その中に、私は立っている。

北里 どんな焦点を結ぶんだ。

馬鹿 わからない。だから、このまま死んでしまいたい。

人道所長 見事だ。

北里 は？

人道所長 北里論文を論破したぞ。

北里 論破？

人道所長 ロンパールーム並みの議論で。

北里 そんなものに負けるか。

人道所長 いいか、我々の目の前には、初手から一枚の鏡があった。

南里 ありません、そんなもの。

人道所長 あるんだ、ほら。

南里 え？

大きなプレパラートが鏡のように立っている。

北里 これは、我々がいつも覗いているただのプレパラートです。

人道所長 そういいきるには、この顕微鏡の中の伝説は、あまりに、左右上下が、さかしまな話ではなかったか。

と、プレパラートの表面を剥ぐと鏡になっている。

馬鹿 (天体望遠鏡を覗いて) ああ――。

北里 どうした馬鹿。

馬鹿 生きているって、嬉しいことだ。

南里 なにいつてんだ。

馬鹿 天体望遠鏡という鏡の末広がり、大宇宙へ向い、人はその末広がりの大宇宙にばかり目がくらし、そいつを征服しようとたくらみました。

人道所長 なぜに、天体望遠鏡を、さかさまから覗くんだ。

馬鹿 顕微鏡になるんです。

人道所長 ほうほう、その先細っていく先には、何が見えるんだ。

馬鹿 やっぱ宇宙が見えるんです。

南里 宇宙が。

馬鹿 (一枚の写真) これが、天体望遠鏡で見た宇宙です。そして、これが(もう一枚の写真) ウイルスの暮しているところです。

北里 宇宙にそっくりだ。

馬鹿 そうじゃありません。宇宙がそっくりなんです。このウイルスの暮しているところに。

人道所長 よくぞ言った、馬鹿。いいか、この伝染病は、宇宙を手玉にとった叛乱だ。

北里 叛乱？

南里 兎の叛乱ですか。

人道所長 いや。この伝染病は、獣が人へ変るのでも、人が獣へ変るのでもない。人が、人へ変るんだ。

馬鹿 人が人に？

暗転。ドブ川の音。ポンポン船の音。紫式部と清少納言にそっくりな文楽人形が、遠くの丘に立っている。

清少納言人形 ほら、御覧なさい式部様。

紫式部人形 え？

清少納言人形 今日は、地球が見ごろよ。

紫式部人形 満地球でございましたかしら？

清少納言人形 いいえ、まだ満地球にはいたりません。上弦の地球ですわ。

紫式部人形 お清ちゃん。

清少納言人形 うん？

紫式部人形 いつかこんな話をしなかったかしら。

清少納言人形 したことがある？

紫式部人形 あんた知ってた？

清少納言人形 なにを。

紫式部人形 それでも月は動いているって話。

清少納言人形 なあに、それ。

紫式部人形 月動説っていうの。あの地球が、蠅みたいに月の回りをうるさくまどわりついているんじゃないかって、この月がまわっているっていうの。

清少納言人形 え？ じゃあ、目が回っちゃうじゃない。

紫式部人形 あたしもそう思うのよねえ。

清少納言人形 ダレ、そんなホラ吹いたの。

紫式部人形 蠅の王様じゃない？

と言いながら、文楽人形は、回り舞台のように回っている。

清少納言人形 ほら、御覧なさい、式部様。

紫式部人形 え？

清少納言人形 今日は地球が見ごろよ。

紫式部人形 満地球でございましたかしら。

清少納言人形 いいえ、まだ満地球には……。

声は、消え入るようになっていく。十二単衣の君が、さっと現われスポットを浴びる。

十二単衣の君 皆様おなじみのお清ちゃんとムラちゃん人形による文楽ショーでございました。

とたん舞台は華やかなサーカスの光景となる。

地球の色どりされた玉乗り。土星のような輪っかに乗っての一輪車。猛獣使い。オー
トバイ・ショーがスクーター・ショーでもいい。ナイフ投げが、ナイフ投げであつて
もいい。「宇宙サーカス」であることがわかってくる。

次々に繰り広げられる妙技、珍技、その中でもとりわけ目につくのは、ガイコツの踊
りである。

十二単衣の君 さて、いよいよ、当サーカス団が誇るキワメツケ、東洋の神秘と呼ばれて久

しい次なる曲芸は、レデース・アンド・ジェントルマン！（ポケットよりホンマモノの
兎を取り出す）お目見得いたしましたる一匹の兎、種も仕掛けもございません。ふる
里は、静かの海、かぐや姫と生まれを同じゅういたします月の兎にございます。こ
の兎が、これより恋しいふる里を偲んで月の輪をくぐりまするが、あつと思ひますれ
ば、いつのまにかこの兎、見事、美しき少年の姿へと転じまする。題して「ああ美わ
しのイカルスの月の輪くぐり」。

ドロ、ドロ、ドロと、太鼓の音はいちだんと高まる。ほんものの兎は、「月の兎」と
変り、宇宙へ飛んだと思いきや、ガイコツ踊りをしていた二人が、「月の兎」を空中
姿勢のまま捉える。

と、奥から、ヤーサンが青ざめて飛びこんでくる。

ヤーサン お釈迦だ！ 裏のドブ川からお釈迦があがったぞ。

「月の兎」はそのまま、そのお釈迦として運ばれる。

奥から、サーカス団の一行が、ざわつくように出て来て、その「月の兎」をとり囲む。
「月の兎」には、いつか蒲団が被せられたように、むしろが被せられる。ヤジ馬たち
は、ざわついている。

白衣を着た人道所長ら四人が出てくる。

人道所長 どうだ。

北里 半分、人になりかかっています。

人道所長 危ないところだった。

北里 所長、この兎、輪っかを握っています。

人道所長 獣の体を使って、伝説の病いはいま、このドブ川の水を媒介にこの一帯に放電し
ていったんだ。

北里 ドブ川を閉鎖しろ！

南里 ドブ川を閉鎖しろ！

北里 放電をふせぐんだ。

人道所長 この兎が川から打ち上げられたのは、十五年も前のことだぞ。アポロ11号が月へ

向った日、その地球の裏側のドブ川で、兎も月へ向ったんだ。

南里 バカげたタクラミだ。

北里 月へ行けると思ったんだらうな。

人道所長 太古という、遠い歳月の月へな。

南里 え？

人道所長 十五年もの間、この兎をむげに放っておいたのか、え？ 何のために雨ざらしに

したんだ。

北里 こうして肉が腐れおち、骨になっていくのを、こいつらは待っていたんじゃないでし

ようか。

人道所長 骨を待っている？

南里 骨が生きているとでも信じているんじゃないでしょうか、こいつらは。

北里 どこにいるんだ、その「こいつら」は。

人道所長 おっと待った！ その右から三番目のガイコツ、顔を見せな。

ガイコツ ……………。

人道所長 てめえだよ。

そのガイコツの顔を剥ぐとアポロ。

北里 あ！

南里 この野郎。こんな所にまぎれてやがった。

北里 この男は、確かあばら骨が一本足りない疑いのある……。

人道所長 そんなことは先から承知だ。

アポロ 俺だって百も承知だ。けれども、とうに、足りない分は埋めあわせたんだ。

人道所長 なに？

アポロ (電信柱をもちだして) こいつが俺のあばら骨だ。

人道所長 そうだ。お前を追い続けてようやく見つけた話の骨格は私が承知の千から、お前

の承知の百をひいた、お前の知らない九百の承知だ。

アポロ なに。

人道所長 この兎は、杉の木の電信柱に長い耳をつけながら、何をしているんだ。

アポロ 伝説を聞いているんだ！

北里 こいつは町の電信柱が、伝説を聞くために立っていると信じているのか。

人道所長 それこそが、この電線という病いにふさわしい症状だ。

北里 え？

人道所長 この伝染病の感染者は、電信柱に耳をつけて、ひとけ人気のなくなった町に出ては自分達の伝説を創っていたんだ。

アポロ 自分達の伝説？

人道所長 兎が聞いたのつけの伝説を聞かせてやる。古く中世はユアロッパ、黒死病というハヤリ病いがのさばっていた頃、人はガイコツの姿となって踊り狂った。

北里 「死の舞踊」ですね。

人道所長 その話を、こいつに感電させろ！

検疫室が運ばれてくる。

アポロ やめろ、やめねえか。

北里 なにも本当にガイコツにしようってんじゃねえ。

南里 レントゲンをとるだけだ。

人道所長 お前の体が忘れてる、あばら骨一本分の記憶を読みとってやる。青写真を持ってこい。

南里 手回しよく。

人道所長 あばら骨の形をよくみろ、一本ずつ。

北里 あ！

人道所長 どうだ。

北里 形が違います。

南里 一本一本、すべてが違います。

アポロ どういうことだ？

人道所長 いいか、こいつのあばら骨は初手から二十四本の骨があって、一本だけがなくなっただけじゃない。

南里 どうしたっていうんです。

人道所長 ニセ札作りの要領だ。

南里 え？

人道所長 ワニ。

北里 ニシキヘビ。

南里 ビーバー。

人道所長 バシリスク。

北里 クマ。

南里 マントヒヒ。

人道所長 ヒツジ。

北里 ジャガー。

南里 ガラパゴスぞうがめ。

人道所長 と、ありとあらゆる獣から一本ずつあばらを頂戴して、こいつの胸に埋めこんだんだ。

北里 では、もともとこの男には。

南里 一本も骨が？

人道所長 骨なし子だったんだ。

アポロ 作り話もいい加減にしろ、そんな話があつてたまるか！

十二単衣の君、女官達をひきつれ、ゆつたりと拍手をしながら、ゆつくりと出てくる。

十二単衣の君 大奥で伺いました。大変愉快な話でございますね、式部。

紫式部 ええ、とても私の物語など、およびもしませぬ。

人道所長 悪魔の話は、我々とてもおよびもつかない。兎が聞いた第二話「古事記」。

十二単衣の君 伊邪那岐命「なにやしえをとめを」と言ひ、おのおの言ひをへしのおち、その

妹に告げたまひし。

紫式部「女人先に言へるのは良からず」とつげたまひき。

人道所長 然れどもくみどにおこして生める子、その名は水蛭子。

アポロ 水蛭子？

人道所長 イザナギとイザナミの間に生まれた子供だ。

北里 地上に、初めての人間の子供だ。

人道所長 それは腕もなければ脚もない、首もなければ頭もない、そして骨さえない、ただの肉のかたまりだ。

アポロ その骨なし子は、どうなったんだ。

人道所長 この子は、葦の船に入れて流し捨てき。葦の船にのせられて、ボロにくるまれ崎形の運河へ流されたんだ。

アポロ そんなものと一緒にされてたまるか。

人道所長 そう、その葦の船には、お前以外も乗っていた。

アポロ 誰が乗っていたんだ。

人道所長 葦の船の葦。これは、ヨシ、アシのヨシとも読めるが、ヨシ、アシのアシとも読める不思議な文字だ。

北里 では、もしかしたらそのヨシの船は、十二単衣の悪しき絹に着飾られた悪魔の船だったのではないのでしょうか。

アポロ 悪魔の船。

南里 すると、この電信柱から聞こえてくる古事記の物語は。

人道所長 船の上の乞食達の話だ！

北里 こいつらの話ですね。

十二単衣の君 いいがかりはやめな！ われらこそ、古より、ドブ川を所狭しと荒くれる原

始家族なるぞ！

北里 船上生活者その数推定十三万、血はつながらずとも、家族のような生活で、日本中のドブ川を漂流している。

アポロ 僕はなにも知らずに、そのドブ川に浮ぶ船の上で暮してきたのか。

十二単衣の君 アポロ、暮してきたのは筏のあばら、聖家族だ。

北里 船上生活者達の暮すドブ川一帯で、近年急激に骨の異常がみてとれる、数多くの獣の死骸が見つかりはじめました。

南里 それらの獣達には、いずれも骨が一本足りません。

北里 これは特異な伝染病です。以上報告を終わります。

人道所長 あと見つからない獣はなんだ。

北里 人です。

アポロ 人？

人道所長 おまえのあばら骨に耳をあててみる。聞こえてくるだろう、兎が聞いた第三話が。

北里、南里ら、アポロを電信柱に押しつける。

アポロ 第三話「十五年漂流記」一九六九年七月二十一日アポロ11号が宇宙へ向った同日、

葦あしの船に乗ってハイエルダールという男が、大西洋の荒波を越えて太古へとむかった。

その時を同じくして、その地球の裏側のこのほど近いただのドブ川に一本の電信柱が、アキカンやワラクズにまみれながら、ぶかりぶかりと漂っていた。その電信柱の上には、半人前の兎と半人前の少年がおりかさなるように死んでいた。……。ブリアン

……。

人道所長 あれから、十と五つの歳を経て、こうして兎が骨になりかかっているというのに、

少年の骨は何処どこにいったんだ。

南里 兎の先についていた少年は何処にいったんだ？

北里 その電信柱の根元を掘り起こせ。

人道所長達が、すっと身を寄せると、すっと後ずさりする十二単衣の君達。

南里 どうして後ずさりをするんだ。

十二単衣の君 え？

アポロ 俺がこの手で掘りおこしてやる。

十二単衣の君 (電信柱の前に立ちただかつて) 夜の電信柱に、なぜ耳をつけない。どうして、アポロ、あんな話ばかりに耳を貸すんだ。

アポロ 失くしたあばら骨を捜すつもりが獣の足をひっぱっていただけというのか……。ブリアン。(十二単衣の君をはねのけて、電信柱の根元を掘り返すが、なにもない)

十二単衣の君 どうしたんだアポロ、骨はみつかったか？

アポロ いや……。

十二単衣の君 誰が信じる、骨のない少年なんて。骨さえ残らなかった少年の話なんて。

人道所長 そうだ、誰も信じない。

アポロ え？

人道所長 誰も信じちゃくれない。骨さえ残らない人間の話なんて。だから創ろうとしてい
るんだ。お前の胸に。

アポロ 何を創ろうとしているんだ？

人道所長 せめて一人前の青年の話を、こいつらは。

アポロ こいつらは？

人道所長 ひるこは、自分の伝説を！

人道所長、北里、南里ら、レントゲン機械をバツと向けると、それは鏡だ。

十二単衣の君 なにをする気だ。

人道所長 お前の胸をうつす、ただの鏡だ。

十二単衣の君 やめろ、悪魔の機械を使うな。

北里 はい、息吸って！

南里 はい、息止めて！

十二単衣の君 こちらへ向けるな！

人道所長 なにをそんなにこわがっているんだ。十二枚のポロに身をくるんで、じつと息を
こらえて、そして吐いてみる、悪魔の息吹を！

北里 十二単衣の下から、何が見えてきた？

南里 あ！

北里 どうした。

南里 みろ！ この胸の写真を。

北里 なにもうつっていない。

アポロ なにも？

人道所長 レントゲンという鏡には、こいつらはどうしたってうつらない。

アポロ どうしてだ？ どうしてこの鏡に映らないんだ。

人道所長 言わずと知れた、こいつらには骨がないからだ。

北里 これでも、作り話か！

レントゲンに向って、とびつく十二単衣の君ら。

三つにも四つにも、レントゲンの鏡は割れて、逃げまどう十二単衣の君を執拗に追う
鏡の群れ。

十二単衣は、ひらりはらりと着物を脱ぎ捨てては逃げようとする。
十二単衣を着た女官達も、次々と着物を脱ぎ捨てていく。
人道所長達は、捕えたと思うたびに、その手にただの着物をつかまされている。

南里 見ろ！

北里 骨なしだ。こいつらは、みんな骨なしだ。

人道所長 兎の肉にそっくりな骨なしのひるこだ。

南里 レントゲンが放電を始めました。

北里 まずいぞ。必ずここで食いとめろ。

人道所長 畸形の運河は、どうでもここでせきとめろ！

一気にひるこ達の、脱ぎ捨てた十二単衣の衣装が宙をとぶように鮮やかに、丸太の門の中へ入ってゆく。やがて、最後の一人「十二単衣の君」が追いつめられる。四方八方から、鏡が「十二単衣の君」を、その球の鏡の中に閉じこめるように当てられている。

十二単衣の君 やめておくれ！

人道所長 やめておくれ！

紫式部 やめておくれ！

清少納言 やめておくれ！

十二単衣の君 宇宙でも見るように。

人道所長 宇宙でも見るように。

紫式部 宇宙でも見るように。

清少納言 宇宙でも見るように。

十二単衣の君 プレパラートにのせて。

人道所長 プレパラートにのせて。

紫式部 プレパラートにのせて。

清少納言 プレパラートにのせて。

十二単衣の君 俺を見つめるのは。

人道所長 俺を見つめるのは。

紫式部 俺を見つめるのは。

清少納言 俺を見つめるのは。

十二単衣の君 対物レンズの舌が。

人道所長 対物レンズの舌が。

紫式部 対物レンズの舌が。

清少納言 対物レンズの舌が。

十二単衣の君 すりよるときのぬめりを。

人道所長 すりよるときのぬめりを。

紫式部 すりよるときのぬめりを。

清少納言 すりよるときのぬめりを。

十二単衣の君 お前らは、知っているのか。

人道所長 お前らは、知っているのか。

紫式部 お前らは、知っているのか。

清少納言 お前らは、知っているのか。

十二単衣の君 お前たちは、また球形の鏡にオレ達を閉じこめ、そしてお前達の、身ぶり干ぶりを、一挙手一投足を、真似できぬ俺を見て笑うのか。

馬鹿 (望遠鏡を手に戻ってくる) 僕は笑いません。あの夏の夜、末広がりのレンズの先に星を見ました。プレパラートの上にあどけない宇宙が見えました。星とウイルスとが、あどけなく息をするところは、瓜ふたつです。

十二単衣の君 ならば、どうして星を鏡の中へ入れないんだ。

馬鹿 生憎、星は生かしていても、ウイルスを生かしておく親切を持ち合わせていません。いつもいつも、馬鹿は親切ではいられないんです。

馬鹿、望遠鏡から取り出したモリで十二単衣の君に襲いかかる。再び、鏡はとびちる。

北里 止めますか？

人道所長 毒には毒だ。

北里 え？

人道所長 ワクチンの思想だ。

十二単衣の君、脱ぎ捨てるものもなく、絶体絶命、まさにモリでつかんとするその瞬間、アポロが、兎を抱えあげて、十二単衣を庇う。馬鹿が投げ出したモリにつき刺さる兎。

アポロ こうして一夜に親切をする。いつも俺が尻をかじり、いつも俺が足をひっぱり、こうして一夜に兎は親切をする。

十二単衣の君 (ぶつぶつと) ワニシキヘビバジリスクマントヒツジャガラパゴスイルカワウサギ。

北里 悪魔の呪文だ。

十二単衣の君 ウサギ。

アポロ ギリシア。

十二単衣の君 ギリシア。

アポロ アポロ。

人道所長 感染したな、あの青年にも。

南里 確かに。

北里 悪魔の呪文をつぶやき始めた。

アポロ ワニシキヘビバジリスクマントヒツジヤガラバゴスイルカワウサギリシアアポロ。

十二単衣の君 その獣達のマンダラが、お前の胸の中で足を引っぱりながら半ばな夢をつな

げているんだ。

アポロ つなげてどうする。

十二単衣の君 お前の胸の中に、もうひとつの地球をつくろうとしているんだ。

アポロ 俺の胸の中に、青い地球を埋めこんだのは、あんたか。

十二単衣の君 そうだ。誰が骨なんか埋めるかい。埋めこんだのは青い地球だ。

アポロ 動くな、俺の胸の中で……青い地球。

とたん、人が知らない、もうひとつの宇宙が見える。

十二単衣の君 青い地球、青い地球、感度いかが。

アポロ こちら、アポロ獣一、感度良好、どうぞ……。

十二単衣の君 筏いかだでできた電信柱のてっぺんが、ゆっくり地面に傾いて、西の空で月と重な

った晩は、オレが話をはじめの宵だから、その杉の木肌に耳をつけておくれ。

アポロ こちら、アポロ獣一……どうぞ。

十二単衣の君 美しいかい？ 人が見つけた宇宙は。

アポロ ああ、美しいさ。

十二単衣の君 月へはもう行ったのかい、ヒトは？

アポロ え？

十二単衣の君 ヒトは、月へ行ったのか？

アポロ 何を言っているんだ。ヒューストン、ヒューストン、こちらアポロ 11号、電気回路

が混線しています。

十二単衣の君 俺はヒューストンじゃないさ。

アポロ 誰だ、お前……。

十二単衣の君 百億年も前に流された電信柱だ。

アポロ バカを言え。

十二単衣の君 お前にオレの景色が見えるか。宇宙の果てと、なにひとつ変らないこの景色が。宇宙と違うところといえは、星が見えないということくらいだ。それを除けば宇

宙と同じだ。風が吹かない。蠅はえのように風は止っている。音もきこえない。ロバのよ

うだ。けれどもそいつを除けば、宇宙と少しも変りはしない。なにも見えないことを除けば、青い地球が見えないということを除けば、紫の色をしたイベリアの夕べが見

えないことを除けば、くがねの如く輝いたオリュンポスの見えないことを除けば、けしの花に染まったパレスチナの死海のあけぼのの、赤銅色のイタリアの、たおやかなポルドーの乳房のそのなにもかもが見えないことを除けば、……これでも宇宙と似ているのか、このひるこの里が。しかし俺は覚えていゑるぞ。この瞳ひとみから無理矢理地球を、ポロツポロツと剥はぎとられた日の、あの青い地球を。百億年も前の日の光を。頭の上を、ようやくすぎていった百億年の光を越えて、ようやく還ってきたつもりの俺と兎が、また続いていく。百億年の黒い光の中へ放り出された、その俺の景色がお前に見えるか。

アポロ こちら、アポロ獣一……了解。お前はダレだ。お前はダレに語っているんだ。

十二単衣の君 サラリと衣脱ぎ捨てて、畸形の運河をさかのぼり、名にしおうコジキは葦の船をのりついで、ひるこの里から、たれに語らん、十二単衣の衣をば、まずは一枚脱ぎ捨てて……。

人類の狂宴、あの生々しい、アポロ11号発射の時の音が流れる。

ヒューストンの声 10、9、8……。

十二単衣の君 ハラリと九単衣いちじゅうも脱ぎ捨ててやがて七つが、六つ、五つ、身のきれるとも三単衣。

ロケット発射音の地響き。

ヒューストンの声 3、2、1……。

十二単衣の君 やがて、二単衣の下から現われしヒトエ。

ロケット発射じゅうおんの轟音。

ヒューストンの声 GO！ GO！

十二単衣の君 ひるこから人へ。

アポロ ひるこから人へ。……鏡おもてで浮かれている青い地球の裏側で、もうひとつの青い地球、お前は人へ何を送ってきたんだ。

轟音。と、それは、ロケットのそれではない。水の轟音である。

人道所長 なんだ、この水音は。

南里 逆流している、畸形の運河が！

北里 なに！

南里 下流から、こちらへ向ってきている。

北里 運河の水が、一の塞とりで、二の塞のコンクリートを突き破とってきてます！

丸太の門が筏になっっている。そこには、十五少年達が雄々しく立っている。

ブリアン 少し遅れてしまったみたいだ、アポロ。駅の上りホームで昼寝をした兎の伝説の先回りをして君を待っていたあばらは僕だ。月の輪をくぐるのにとまどった。

アポロ え？

ブリアン こいつが兎の夢だよ。十三・五人の少年になって還ってきた。

北里 やはり、太古から伝説が流れてきていたんだ。

南里 どうします。

人道所長 慌てるな！

南里 え？

人道所長 こちらの運河の塞も破れ！

北里 そんなことをすれば、また伝説の病いがこちら一帯に。

人道所長 太古から向ってきたこの伝説の病いと、宇宙から向ってきたこの伝説の病いとを。

ここで共に殺してしまえ。

北里 大丈夫でしょうか。

人道所長 毒には毒だ！ 開けろ！ 宇宙のひるこを運河に流せ！ 畸形の運河の塞を破

れ！

塞が破られると、この世のものとは思えぬほどグロテスクな姿をした獣たちがあふれ出す。

その流れの中に、アポロ、ブリアンはまきこまれる。

ブリアン 運河が、うず巻き始めた。うずに巻きこまれたら終りだ。

アポロ パピルス船の横糸をたちきれ！

ブリアン どうするんだい、アポロ。

アポロ 俺は、伝説をつくるんだ。この太古と宇宙の渦の中で、この伝説の筏を、また、バラバラにするんだ。

ブリアン やっと拾い集めた、あばら骨をか。

アポロ バラバラになって、この渦の隙間を抜けていくんだ。抜けてからまた一緒になろう、

伝説の少年。

ブリアン アポロ。

アポロ え？

ブリアン 君には、二十四本のうち、一番頑丈なアバラ骨をあげる。さ！

ブリアンのつかまる電信柱と、アポロのつかまる電信柱が、火花を散らすように、両側へとぶ。

ブリアン 右手を御覧、ダフネの木だ。

アポロ 月桂樹か。

ブリアン 左手を御覧、ヒュアキントスにキュパリツソスだ。

アポロ ヒアシンスに糸杉か。

ブリアン けれども、みんな、青年のために姿を変えた伝説ばかりだ。そして、ここが、君のために流した、琥珀色こはくしたエーテルの運河だ！

畸形の運河が、流れ始める。